
色彩コード

水域 色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色彩コード

【Nコード】

N1036M

【作者名】

水域 色

【あらすじ】

世の中には、当たり前のように「色」や「音」が溢れ返っている。人間の感じられる2／5の情報がまさしくそれらだ。

音楽好きの古音雨姫ふるねつぎは、絵描きで、常にヘッドフォンを付けている雛墨ひなずみあずさ 梓と進学先の高校で出会う。

そして進学先にはやりたかった文化系部活がなく、激しく落胆する雨姫だったが…？

雨姫の幼馴染でとにかく元気な望月 愛と、新しい友人櫛枝 蓮時くしえだれんじ
みなつきあきのや水無月秋乃のちよつと不思議で切ない関係でつながった、音楽と
美術の文化系青春ラブコメ！！

*1-1色 橙の朝（前書き）

プロローグ

・ 零話

それは本当に綺麗な配色だった。

今まで感じたそれとはまったく別物で、まるであれは…
頭の中に音楽が流れこんだ。

優しくてあたたかなまどろむような音。

これが彼女の音なのだろうか。

それはほんとに、ほんとうに綺麗な音だったんだよ。

こんなことあるんだなって…

君から奏でられた音に沢山の色が重なっていく。

優しくて落ち着く、どこか懐かしく感じる色。

この色が君の色なのかな？？

あの一室から生まれた「色」と「音」は。

世界を潤す唯一の「感情」を。

気づかせてくれたんだと。

きっと世界は

そうゆうふうになっていく。

*1-1色 橙の朝

なんて心地がいいのだろう。

カーテンの隙間からこぼれる朝の優しい光に眩しさを覚えるも天国のような心地よさで、その何とも言えない気持ち良さにふわり身を任せて数時間。

誰もが其れに屈するであろう現代に在る最強の兵器ともいえる暖かみに、また今日も完全に負け。だって、この心地よさの誘惑って皆も拒絶なんてできないでしょ？

「朝のふっわふわの布団つつーのはなんでこう……うーん」

三度目の眠りの世界への誘いに意識を放棄しかけたところで耳に軽快な音楽が流れこみ、鼓膜を心地よく揺らす。少し落ち着いた優しい雰囲気、朝にぴったりの音楽だ。大体寝る前に音楽を聴きながら寝る習慣があるのだけど、朝起きた時に気持ち良く起きられるようにとセットするCDも前の晩に悩んだりする。

要するに目覚ましにセットしてあったオーディオコンポが朝がきたのだと主張するように鳴りだしたのだ。

「んああああ……はい。はいはいはいわかった、わかったから静まれ、今起きるからああ」

止まらない欠伸と襲いくる睡魔との激しい戦闘は相当の気力と精神力を必要とし、あまりの強敵に何度も諦めかけるも、なんとか残量の少ない気合でそれらを払いのけベッドからずるずると這いずり出る。

喉が焼けるように痛い。乾ききった喉を潤すために水を求め台所へと向かう。

とある1LDKのアパートにあるその台所は、小さいながらも使いやすいように綺麗に整頓されている。それに錆びやネジの緩みは無いようによく手入れしている。

「つつぷはあっ……美味い！ いやあ、今日こそ天に召されるかと

思ったな」

たかが水道水されど水道水。美味いったら美味い。砂漠の中のオアシスよろしく乾いた喉を潤し、ぱしゃぱしゃと顔を洗って目を覚ました。

あ、申し遅れました俺の名前は古音雨姫ふるねうきと申します。今年から高校に入学しました。って一体誰に話しかけてるんだ俺は、もう時間が無いってのに。

なんやかんや眠い気持ちを押し殺してヤカンに水を入れ、ガスコンロに置いて火をかける。

朝に飲む珈琲がたまらなく好きなのだ。休みの日など時間があるときはパンを焼いたり、ちゃんと豆を挽いたものを使って珈琲メーカーで作るのだけれど。いかんせん平日は時間が無いので殆んどインスタントで済みます。なんてったって楽だもん。

淹れたての珈琲を口に含み、香りを楽しんで一息つく。この辺りになるとだいぶ目も覚めている。ふと携帯電話を開いて時計を見るともう時間もない。入学式からまだ数日しかたってないし、遅刻するものなんとなく気が引ける。流石にいきなり不良のレッテルを貼られるなんてお断りだ。遅刻しただけで不良扱いされるのかは、まあわからないけれど。

朝は低血圧のせいなのかあまりよく起きれなくて苦手な為、前日に簡単な弁当を作って置く習慣がある。今日の弁当も昨日の晩御飯の残りをさくつと詰めて、ご飯もゆかりという梅のふりかけを混ぜただけのシンプルな弁当だ。

飲み物には、さっき淹れたインスタント珈琲をサーボマグに注ぎ込み、持って行く。勿論気分によってお茶にしたり紅茶にしてみたりするんだけど。

そんな弁当とサーボマグをさくつと鞆につめ、寝起き早々慌ただしくアパートをでたのだった。

錆び付いた匂いが仄かに香る鉄の階段を軽快に下りて外へ出ると、春独特の暖かで涼しくて、この季節独特の良い香りのする風が吹いていた。この風を浴びると朗らかで清々しい気持ちになる。ああ新生活、って感じ。

太陽の温かい日差しに照らされながら今日もi podとヘッドフォンをいつものように装着し、軽い足取りで歩き出す。（オレンジ色のi pod nanoと、audio technicaのヘッドフォンはとても気に入っているのだ）

朝の爽やかさとi podから流れてくる音楽に思わず微笑んでしまう。

「こんな気持ちいい朝とお気に入りの音楽と。明らかに青春ポイントあがってるな、これ！」

某電波ラノベではないが本当に気持ちいいのだ。この二割り増しくらい清々しいのは春だからだろうか、それとも新しい学校と仲間希望が溢れているから？

よくわからないけれどこれって、高校生活もとりあえず出だし順調って雰囲気がある。

学校までの道程に、二、三件のコンビニがある。

実はこの、「高校の通学の途中にコンビニに寄って何か買い物をしていく」っていうイベントに酷く憧れている。今までなんとなく目に入ってきていたんだけど、仲のいい友達同士でコンビニに入って仲良くおにぎりや飲み物を選ぶ姿がなんか羨ましくて。ずっといいなあって思っていた。

でもなんせ事情があって一人暮らししているもんだからお金があるまらない。っていうか一つ一つの商品がそこらのスーパーに比べて高い。

その辺を考慮すると俺としては断然スーパー派だけど……だけど、だけれども、いつか朝にコンビニに寄ってから学校に行きた

い。

まあどうしたって一人暮らしなので食材でもなんでも安さが重要なのだ。安い物の為なら主婦のおばちゃんの戦場、タイムバーゲンにだってこの身一つで飛び込んでいく。

でも…ものすごく憧れる。憧れるもんは憧れるんだな、うん。

通学路でもある大通りを歩いていると俺の住んでいるアパートから数えて2つ目のコンビニの前を通った時、ふと目に入った。

「ううううん……………」

女の子が、奥の硝子の扉に陳列されたペットボトルの飲み物コーナーと、パックの飲み物コーナーを行ったり来たりしながら、なにかものすごい形相で両手に飲み物を持って悩んでいた。よく見ると今年から通い始めた俺の高校の制服と同じだし、さらによく見ると確かあの子は同じクラスの子みたいだった。

まあ…まだ話した事はないんだけどね。まだ、なんとなく恥ずかしさやら思春期独特のあれでなかなか新規の友人を作れずにいた。でもなんか見かけちゃったら気になっちゃったし、折角だから憧れのコンビニに一瞬入ろうかなって迷ったんだけど、弁当も飲み物も既に準備してあるからなあ。

少し残念に思うけれどここは我慢しようと思う。近々近所のスーパーの特売だし。

でも、今日は学校に着いたらコンビニで見かけたよくヘッドフォンをしているあの彼女に思い切って話かけてみようかな。

あれからコンビニを通り過ぎてふと気づいたんだけど教室で座っている席も、彼女の後ろの席だった事を思い出した。だから前から話してみたいなって思っていたんだった。

思い出すとなんとなく気になったのでちょっと小走りでコンビニまで戻ってみる。「ありがとうございましたー」と元気に良い店員の声が聞こえてくる。さっき見かけた同じクラスの女の子以外にも

学生が何人か入っていて、友達同士仲良さげにコンビニの袋を持って歩いてくる。うう、やっぱ羨ましいな。だけどさっきのコンビニの女の子とはまだ鉢合わせていない。もしかしてまだコンビニにいたりしてな。流石にそれはないか。

そーっとコンビニの窓から覗いてみる。よくよく考えると傍から見たら結構怪しい行動だったかも知れない。警察に通報されなくてよかった。

コンビニの中にはまださっきの女の子が飲み物を手に持って悩んでいた。まさか本当にまだ悩んでいるとは思ってなかったので、びっくりして少しずっこけつつも笑ってしまった。

今は飲み物選別に夢中みたいだし、そっとしておこう。学校で話せたら好きな音楽の事とか、結局何の飲み物を選んだのかとか思い切って聞いてみよう。

「あれ、でもこうゆう風に初めて声をかける時って、どうやって話しかけるんだっけ？」

そんな新鮮でキラキラした春一番の風のように淡く甘い気持ちでコンビニを後にし、i podから流れる優しくも力強い音楽と一緒に学校へ向かった、綺麗に橙色に染まった朝だった。

*1ー1色 橙の朝（後書き）

主人公としてこの物語を進行している彼の名前は古音^{ふるねうき}雨姫といいま
す。

春の初々しさと新しい生活に心を躍らせる気持ちをうまく表現した
かったのですが、どうでしょうか。

ところで朝コンビニに入るのとか憧れませんか？ 昼ごはんがコンビニ
のご飯の友人は大体「一口頂戴」の餌食になってました。懐かしい。

*1-2色 桜色の学舎

アパートから歩いて三十分位であろう学校までの道程を音楽と共にゆつくりと歩き、学校に近づくにつれてまだ綺麗に咲いている桜の風景が緩やかに、ふわふわと見えてくる。ひらひら、と少し散っているのもまた心を揺さぶる綺麗な光景だ。

俺が今年から通っているこの学校、ひめがみこうこう姫神高校は校舎の後ろに、緑が豊かで流れている山の水も澄んでいる姫神山が聳え立っていて、その麓ってほどもないが姫神山の近くに姫神学校は建っている。

そしてその姫神山には小さな公園や展望スペースがある。俺も昔小さい頃よく遊びに行ったものだった。公園には降りきるまで結構長い滑り台があって、昔はそのあまりの長さで高さに足がすくんでしまっていたけれど、この前ふらっと姫神公園に行った時にはもう、昔のように長く感じなくなってしまっていた。ちよっぴり時の流れに切なくなった。

夏には姫神公園でBBQや花火などしながらワイワイとキャンプをしている人達も沢山いるし、そこからは星がかなりよく見えるから天体観測をしにくる人もいる。満天の星空って、見上げると壮大で空に広がる黒の先には果てがなくて。数多に光り輝く星を見てるとなんて自分は小さいんだろう、とか。悩みとかも掻き消されて無心になれる。星を見上げることや星座、宇宙の事を考えたりする事は大好きだ。

そしてこれも夏に多いんだけど、特設ステージで音楽のイベントもやっていたりする。中でも姫神ロックフェスという名のイベントには俺もよく見に行くんだけど、規模が小さいながらも毎年ものすごく盛り上がる。ROCK、ラウド、メロコア、ミクスチャー、エモ、メタル。なんでも有りのイベントだ。モッシュやダイブがおこり熱気が物凄い。そこにいる全員が音、空間を共有して夢中で音

楽に身を任せ、リズムに身体を乗らせる。いつかこのステージに上がってみたい。演る側のステージからみたお客さんのうねり、顔、声を全身で浴びてみたい。そう、よく懂れたものだったな。

あ、そうそう。姫神山にある幾つかの神社はとても大好きな場所。長澤神社と呼ばれる山の中にある神社は山の中なので当然周りには様々な植物と小さな沢、沢山の樹に囲まれている。

本堂に行くまでの道中は、古びた石造りの階段を登るのだけれど、その階段に鳥居が何箇所にも建っていてちょっと独特の雰囲気がある神社だ。

そんな長澤神社にはたまに行っては癒されに行く。大切な場所の一つだ。姫神山の神社に限らずとも、あの神社独特の雰囲気はたまらなく好きなのだ。静かで、厳かで、優しく。全て諭されているような。

あと因みに、山の麓にもう一つ小さな社がある。此处は余り知られていないけれど、とても綺麗な水面がある小さな社。ここにも小さな頃によく来ていた場所で、お気に入りだ。

そして姫神高校を紹介したらやはり、これに尽きる。

姫神高校は春になると桜が綺麗に咲く学校として有名であり、その量も相当のものなのだ。長樹の桜も数本所有している。校門を抜けると一望できる桜の景色は圧巻だ。目の前いっぱい咲き乱れる桃色、ひらりひらり静かに散っていく花弁。その光景はまさに幻想的過ぎてちょっとした異世界なんじゃないかと錯覚してしまうくらいに、だ。

わかりやすく説明すると、それは休日になると一般の人達も見にくる程の絶景なのだ。当然小さな頃からちよくちよく見に来ていた。はるばる県外からもくる人もいるらしい。

「うーん、淡い桃色に染まった世界だな。何回眺めてもやっぱり綺麗だわ」

この桜が目の前いっぱい咲き乱れる幻想的な風景が入学の決め

手になったのは秘密だ。

そしてこの風景には、大切な想いも思い出も特別な感情も沢山詰まっている。

淡い桃色をじっと見てみると心の奥がじわっと何だかわからないもので満たされていく。

気を抜くとヘッドフォンから流れる音楽と風景に涙腺をノックされて、思わず泣いてしまいそうになる。理由など、なにもない。

~~~~~

「おっはよーう、雨姫！こんな所でなにぼさっと立ってんのー？」

「のあぁっ!!」

突然の衝撃に勢い余って数歩前のめり、装着していたヘッドフォンがすっとんと首元に落ち、案外すっぱり収まった。ぶつかった背中にじわじわと鈍痛がはしる。一瞬なにが起こったのかわからなくなり、ちよつとしたパニックになる。しかしよく考えるとこの痛みには身に覚えがあるなと気付いた。

この朝一番俺の背中に軽く体当たりしてきた、今日も今日とて元気いっぱいもちつきあいの女の子は俺の幼馴染の望月愛だ。

程よく伸びた髪は薄く茶色に染まっている。綺麗にまとまったその後ろ髪を大胆にアップにしている、ダッカルでデザイナー的に固定している。使っているダッカルはピンクの花とかがラメラメの綺麗に装飾されてある。なにやらそのちよつと派手目のラメラメのダッカルに近頃の望月さんは、ハマっているらしい。

まあ、正直幼馴染目線でもその髪型はよく似合っているし可愛いと思う。そして朝からこの幼馴染の無垢な笑顔を見るとなんとなく気分が落ち着くし、落ち込んでたとしても元気になるような気がする。実は朝、愛に体当たりされて微笑まれると今日は良い事がある噂がある。なーんて。そんなのないない。

この学校の女子の制服はセーラー服で、近頃の高校はブレザーが多いなかこの学校は昔から伝統なのらしい。勿論男子は学ランだ。なにやら校長の趣味が思いつきり影響している気がするんだけど気のせいかね？でも個人的にもセーラー服ってのにはこう……もんもんとしたこう……うん、すみません要するに好きな訳なのです。

この桜の咲き乱れる桃色の世界にセーラー服が本当によく合っていて、その幻想的な光景に現れた幼馴染の愛に思わず見とれてしまっていた。

「いっつつつ……あのな愛、いいか？ここ日本での一般的な挨拶ってのはさ……」

「おはよう、雨姫。ほら雨姫もっ」

なんか悠長に顔覗きこんで微笑んできてますがこの幼馴染俺の言葉を盛大に遮りましたよ。

「ああ、なんか腑に落ちないけどまあいいや、おはよう愛。どうした、今日はいつもよりも学校に着くの早いんじゃない？」

「うるさいよ、あたしだってたまには早く登校したりするよもう。まあほら、なんたって春だしね。それより雨姫、なに朝からぽーっとしてる……ああー」

「うん」

愛にはなにも言わずとも俺の考えている事が伝わったらしく、愛も少し目を細めて感慨深そうにこの桃色の風景を眺めていた。ゆっくりとした時間を桜が彩っていく中、愛は軽やかにステップして俺の前に出てきた。

「雨姫、早く行こう？遅刻しちゃうとも知らないよー？」

「ああ、うん。今行くよ」

そんな他愛もない、けれど確かに平和な何気の無い朝のやり取りはまだ少し高校に慣れていなくて緊張した心や体をほぐすには十分だった。ふわふわと桜並木を歩いていく幼馴染の姿を後ろから眺め、

ポケットの中のi p o dを操作し電源を落とすと、桜舞い散る道を  
学び舎に向かって俺はゆっくりと歩き出した。



## **\*1－2色　桜色の学舎（後書き）**

でましたよ幼馴染。

雨姫の幼馴染の望月愛です。

とっても愛嬌のある明るい娘です。

今回は姫神高校と姫神山の風景描写に挑戦しましたがうまく伝えられてるか、自信がありません。（笑）

綺麗な桜の風景に、雨姫はヘッドフォンから流れる音楽も相俟って見とれてしまいます。

仲の良い友達との絡みにしても、毎日変わる風景にしても。

## \*1-3色 翡翠の窓

足早に去っていく幼馴染の背中を見届けて、桜の花弁が舞い散る中。玄関先で肩に付いたひとひらの花弁になんとなく愛着が湧いて、玄関に入って間もない所にある傘置き場にそっと置いた。

もしかしたら風に乗って置かれっぱなしのどれかの傘に入るかも知れない。傘を開いた人が驚くかもなんて思ってたらなんだか笑えてきた。

まだ入学して間もない為か、玄関を通るのにまだどこか少し緊張した。下駄箱にて上履きに靴を履き替える際、肩に掛けている鞆がずり落ちそうになって背負い直す。

校舎に入るとそこからまず目に飛び込んでくるのは綺麗な中庭。綺麗に配置された大きくて立派な木々達は春の陽気にぽかぽかと照らされ、心地よい木漏れ日が中庭の草花に差し込んでいて繊細で鮮やかに見えた。

沢山の緑は今日もふわりと揺れて、登校してくる生徒を優しく出迎えてくれる。

だがしかし今日は、時期も時期なので部活の勧誘陣がそこには待ち受けていた。それはもう廊下いっぱい。そりゃまあ、新入生が入ってきたら部員獲得の為に精を出すものだろうけれど、その光景はなんとも圧巻だった。

みんな朝だというのに腹から声を出しているし、ユニフォーム姿、柔道着、演劇の衣装やらなんだかも、玄関前の廊下が軽くお祭り騒ぎみたいになっている。

入学してから知ったことなのだが、この姫神高校はイベントや行事などには何気に全力なのだ。それはもういちいち熱くて火傷するんじゃないかなんて思う程に熱い。修造並。

今思えば入学式に日、先輩方に俺たち新入生はかなり熱く歓迎されたものだ。

廊下や掲示板は勿論のこと、まさかトイレにまで「入学おめでとう！」と張り紙されていたのには流石にびっくりしたけれど。

まあ兎に角俺はこういった何事にもいちいち熱くなれる雰囲気がとても気に入っている。だって折角の高校生活だ。一つ一つの行事を全力で楽しみたいし、そんなイベントでなくても一日一日大切にしたいからな。

「野球部どうっすかー!?一緒に甲子園目指しましょう。南ちゃんみたいなマネージャーも大募集です」

「サッカーやりませんか?ボールは友達。」

「一緒に演劇してみませんかああ?」

「柔道部に入って身体を鍛え、柔の道を一緒に歩まないか?」

だから今日も玄関周辺は様々な呼び声で溢れている。

バスケやサッカーは中学生の頃に体験入部したことはあるし、体育でも授業でやったことがある。

まあ頗る不出来だったため入部の方は早々に辞退した。バスケではシュートしても的外れな所に飛んでいくし、サッカーに至っては走って皆についていけず、動きに合わせるできないからパスだってもらえないし。

サッカーってグラウンドで孤独と戦う競技だったっけかなと勘違いしたほど、パスはもらえなかった。

どうも俺は運動があまり得意な方ではないみたいだ。認めたくないけど。

運動会や体育の時間で痛烈に思い知り、中学の後半にはそれを認めるを得なかった。御陰様ですっかり運動不足だ。

廊下の激しい喧騒をなんとか切り抜け、運動部の勧誘係から半ば無理矢理に持たされた部活紹介の用紙を軽く見た位にして鞆に詰め込む。

実は入学式以来ずっと文化系のとある部活の勧誘を待っているのだけだ。

何気に気になっていたのだがあまり活動的ではないのだろうか。もしくは勧誘する程部員に困っていないとか。

あれ？もしかして…ないのか？いや、まさかな。

そんなことを思っていると丁度前から先生が教科書を抱えながらゆっくり歩いてきた。現国の教科書を持っているから、きっと現国担当の教師なのだろう。

渋めのグレーのスーツを着ていて、恐らくポマードを使っているであろう整った髪型をしていて、少し痩せている先生だった。

「あ、おはようございます。すみません先生、いきなりで申し訳ないんですが、一つ聞いてもいいですか？この学校に現存している部活のリストとかつて、職員室とかにあるんですか？あるなら是非見てみたいんですけれど」

「おはよう。ん？ああ新入生か。入学おめでとうね。部活のリスト？ああ、えっとね、一年担当の教師達が今朝会議とかしてみたいでさ、一応部活要項のプリントでも配るべきだとか話していたみたいだよ。だから確か今日の朝のホームルームで配るって言っていた気がするから、多分もう少ししたら見えるんじゃないかな？」

くしゃっと顔を綻ばせ、まるで仲良しの親戚のおじちゃんのように笑う。雰囲気がいい先生だなと思った。第一印象ってやっぱり結構大事だよな。

現国は是非ともこの先生に教えてもらいたい。

「おお、本当ですか？そうだったんですか。ありがとう御座いました！！」

なんとこれはタイミングがいい。教室へと向かう足取りが少し軽くなった。

まだ慣れない新しい環境は容易に気分を高揚させたり緊張させたりする。もうクラスメイト達はみんな登校し終わっているのだろう

か。俺が一年間過ごす教室はこの階段を上がった先にある一番奥の教室だ。

~~~~~

教室に着くと、まだ新しい環境に慣れない生徒達独特の空気感がゆったりと漂っていて、どこか皆落ち着かずソワソワしている気がする。

キョロキョロしている人や、読書に没頭する人。窓の外を眺めながら音楽を聴いている人、同じ中学出身の友達とおしゃべりしながら知らないクラスメイトを横目で気にしている女の子のグループ。まだ入学して間もないことだし、これに関してはやはり自分を含めてだけど。

けれどまあ徐々にそんな空気もこの春風に乗ってどこかに行ってしまうのだろう。

「おはよう古音。今日はぎりぎりだったな。」

自分の席に着いて、鞆の中身を整理し終わり、首に掛かっていたヘッドフォンを外して鞆にしまう。

窓から見える外の景色を見つつ机にのっかかりながら一息ついていると、その男は話しかけてきた。

こいつの名前は櫛枝 蓮時。くしえだれんじわりと物静かで一見クールだけど程よくくだけていて絡みやすい。話してみてもわかったのは漫画や小説、アニメが大好きで結構そっちの方はいけるクチらしい。

そして短い髪で一重の瞳はなにかと誤解されがちみたいだけど、俺からみたら整った顔立ちに髪型もよく似合っていて格好良い。おまけに性格もすごく良かったりする。

実際話しかけられるまでは、悪いことしたっけかなと思う程になぜか睨まれてるなあ：とか、そういう風に思っていたから櫛枝って人はあんまり話しかけられたくないのかななんて、正直怖かったりした。

初めて話した時の会話の内容は漫画の話だった。俺も漫画が大好きだったから、蓮時と仲良くなるのに時間はあんまり必要じゃなかった。

「ああ、おはよう蓮時」

「今日も部活の勧誘すごかったな。古音もやっぱり？」

蓮時は大量の紙束をひらひらさせて苦笑いすると、俺もちらっと鞆の中の紙束を見せれば苦笑いを被せた。

そしてお互い机に大量の部活勧誘紙束を並べ、眺める事にした。

「そういえば蓮時はなにかやりたい部活はあるの？」

「いや、まあ中学の時はバスケ部だったんだけど高校ではどうかな、実はまだ全然決めていない」

くっ…そうだった。この櫛枝蓮時なる男は運動神経がすこぶるいいらしい。スタメンだったって言ってたし。どこだっけかな、ポイントガードだったかな。…なんかカッコいいな。

ただこのときの俺の半端じゃない悔しさに全米が涙したことをこの男は知らないのだろうか。

「折角バスケでいい感じだったんなら続けたいんじゃない？諦めたらそこで試合終了だよ？楽しそうだしカッコいいじゃんバスケ」

「その物真似びっくりする程似てないな。まあん…確かに結構前から誘われてはいるが、折角高校に来て、新しい環境なんだから俺は出来ればなにか新しいことをしたいな」

弓道部とか、ちょっと気になるかもと屈託のない笑みを浮かべて蓮時はそう言った。弓道部か、確かに渋い。落ち着いてて格好いい。そして俺の物真似はそんなに似てなかったのか、自信あったのに。

「なるほどねえ。俺はさ…」

と、言いかけた所でホームルームの始まりを告げる鐘が、早く自分の席に戻れと急かすように教室に鳴り響いた。

蓮時も鐘の音を聞くや否や軽く手を上げて自分の席へと戻ってしまった。

ええー俺、まだ喋りきってないのに……。今日二度目の遮りに少しだけ、ほんの少しだけだけど切なくなつた。

廊下では走ってギリギリセーフを狙う人などの喧騒で結構騒がしい。教室の中もまだ話足りない女子や男子が自分の席へと渋々戻るとまたすぐに近くの友達と話し始める。

昨日見たテレビの話や趣味の話、高校で習う勉強の話。お互いをもっと知って仲良くなるように話に花を咲かせている。先生がくるまではどのクラスだってどの学年だって大概そんなものだ。

そんなことを考え、ふと前の席の方を向くとそこには今朝のコンビニの娘が息を切らして座っていた。

確か名前は雛墨梓^{ひなずみあずさ}。なんだか入学式に初めて顔をあわせてから妙に記憶に残る名前と雰囲気だった。

どうも彼女は今ギリギリで着いたらしく、バタバタと席に着くと息切れした小さな声で、

「ま、間に合ったあ……良かったー」と声を漏らしている。まあぶっちゃけ全然間に合っていないんだけどね。

あれからまたしばらくコンビで悩んでいたのだろうか？だとしたら、とてもマイペースというか。ゆっくりな人なんだな。

彼女はまだヘッドフォンをつけている。取り忘れているのか、まだ音楽を聴いていたのかそうゆうデフォなのか。うーんなんか可愛い。

流石に俺はもう外して鞆の中だけけど。

そして音楽好きとしては多分……まあ多分皆も同じ事だと俺は思っているんだけど、どうなのかな？ってか少なくとも俺はそうなんだけど。

イヤホンやヘッドフォンを付けている他人が今なにを聴いているのか、その音楽再生プレーヤーには一体何を入れているのか。どん

なジャンルの音楽が好きなのか。これ、すごい気になるんだよね。
「うわひゃあっ」

小さな体がびくうううと揺れた。ちょっと話しかけようと思つて小さく肩をたたいたらなんと可愛い驚き方だろう。でもなんだろう、少し悪いことした気持ちになる。

けど音楽に気持ち、意識が深く深く入っていると、些細な事でも過剰にびくったりするんだよね。わかるわかる。すごくわかる。俺も何回も同じ体験を経験していますから。

やがてゆっくりとヘッドフォンを外すと此方へ振り向き

「す、すすみませんっ、音楽に夢中になってっ！」

あわあわと手を右往左往させている彼女は、肩にかかる位のうすい桃色の髪をしていて柔らかな雰囲気。

その髪にはゆるーくパーマがかかっているふわふわだ。思わず触りたくなる衝動に駆られたのだけれどなんとか抑える。

なんかこう：小動物みたいで可愛がりたくなる。少し低めの身長がまた可愛さに拍車をかけている。ってかヘッドフォンつけてる娘っていいなあ。いいよね？完全に胸にキュンってくる。雛墨さん凄く似合うなあ、ヘッドフォン。

「あ、うあ、いやこっちこそいきなりごめんっ！えーっと、名前俺、古音雨姫っていうんだけど」

「あ、はい。私は雛墨梓っています！え…っと。雨姫君よくヘッドフォンしててなんかちょっと気になって。私、名前入学式の日覚えてましたよ」

初めてこんなに彼女と言葉を交わし、初めて感じる彼女の屈託のない物腰とふわりとした微笑みや優しい声質。

彼女の綺麗な瞳を見つめているとその中に吸い込まれるような錯覚に陥りそうになる程に、可愛い。

ってかあれ？俺の名前覚えてくれたんだ。しかも気になってたなんて、それはずばり今日まで俺が思っていた事なだけけれど。

なんだか得体の知れない嬉しさが心の奥からじわじわと溢れ出し

てくる。

そっか、俺だけじゃなかったんだ。彼女も見えてくれていたんだ。
「えっと、雛墨さんは」

「いやいや、全然梓でいいですよ？名前で呼んだほうが、親近感も沸くし」

「本当？んんー…じゃあ、ちょっと恥ずかしいけれど梓って呼ぶよ。
あのさ、今朝信号待ちしてるときコンビニのほうをちらっとみた
んだけど、梓なんか飲み物もって悩んでたよな？」

梓はみてたんですかああ！？と両手を頬にあて、顔を赤らめると
話しかけてくださいよーと軽くどつかれた。

右肩に下辺りに思いっきり入ったね。これが何気にちよっと痛か
った…。まあすぐ後であわあ言いながら謝ってくれたのが小動物
みたいで可愛かったから良しとしよう。

「あれは、なにを悩んでたの？」

「あれはですね、今日のお昼もしくは休み時間に飲む為の、苺牛乳
とフルーツ牛乳で悩んでまして…」

「あー、成程ね。その二つで悩んでたんだ。どっちも捨てがたいな
ー。うんうん。で、どっちにした？」

「コーラにしました」

「ううえええええふえええっ！！」

ちよ、おまつ。この日一番のずっこけを披露した。それはドリフ
のコントばりに。机が壊れたかと思うくらいに激しくだ。

だって、それはもはや牛乳じゃないしな？

つーかもうジャンルが違うよな、乳製品っていうカテゴリーから
逸脱しちゃってるし炭酸だしな。いやジャンルとかの話じゃないか
これはもう。面白さのレベルが違う。

ああわかった。この子天才なんじゃないかな。天然だけど、この
調子でボケられたら笑いすぎて腹筋が崩壊してしまう。

そしてこれから梓と音楽の話を展開させようと話題を変えようと

したら思ったら担任の先生が教室に入ってきた。

梓は先生に気づくと俺にしかわからないような目配せをして小声で「ごめんね。じゃあまた、後でね」と呟いた。

今日は盛大に遮られるな。三回目は流石に……きつい。今日は良い事起こりそうだったのに。よし、俺ちよつと泣いてこようかな。

あれ？けどまでよ……？また後で、だって？

おお、なんか俄然元気が出てきた。ふへへ本当に男って生き物は単純なのだ。

「みんなおはよう。じゃあまずこれ。今朝配られたんだけど、まああれよね。この学校の部活動リスト。これをみて参考にするといいわ。よくみて決めるようにねー」

担任の女教師、中野先生の明るい声が響く。新任ではないけれど、かなり若い先生だ。

髪のアレンジの仕方は雑誌のモデルみたいに斬新で、ブランドものの立派なスーツ。なんか色っぽいようなそうでないような。けど整った顔立ちをしていて早くもクラスの人気教師になっていた。

前の席から順々に後ろにまわってくる紙を見て、クラスがまた思い思いに喋りだした。

そして梓から手渡された部活動リストを片肘ついて眺める。

「はぁあん、やっぱ運動部は沢山あんのなー。」

今朝勧誘を行っていた部活の名前をさらっと見る。そして視線は上から下へと徐々に文化系一覧へ。

……………ん？え？

なにこれ記入ミスなのかな。

なんで文化系の部活欄には演劇と吹奏学部としかないんだ？これってなにかの冗談としか思えない。

あ、もしかして新入生に対する盛大なドッキリなんじゃないの？突然の戸惑いに少し目の前の景色が歪んだ。

「あの。中野先生、文化系の部活ってこれだけですか？」

思い切って聞いてみた。これは流石に記入ミスだろ。だってほか

にも沢山あるはずじゃないか。茶道部とか科学部とか手芸部とかさあ！

「ん？ ああ。 そうね、 その2つ以外は廃れていって廃部になったんだよね残念ながら」

そう衝撃の言葉を言い放つとあははと教壇で無邪気に中野先生は笑っていた。

「ええええええええええ！！？？」

二つの声が綺麗にユニゾンした。

その声の主の名前は目の前にいる雛墨梓だった。

俺と梓はしばらく見つめあった後、2人は力なく机に突っ伏したのだった。

*1-3色 翡翠の窓（後書き）

でましたヒロイン。

ひなずみあずさ

雛墨梓と申します（＊・ω・）

おっちょこちょいだけどどこかのんびりしているふわふわ美少女です。

ようやく仲良くなれそうなフラグがたちましたね。

あずあずはいったいどんな音楽を聴いているんでしょうか。

*1-4色

紅蓮の放課後

中野先生からの衝撃のあの発言から何時間が経ったのだろうか。

頭はそのショックで完全に呆けている為、朝から授業はまともに受けることが出来なかったと思う。ていうかうん、ごめん全然出来なかったな。

授業の途中何回か当てられたけれど答える事は全く出来ていなかったと思う。頭がぼんやりしていてよく覚えていない。隣の席の優しい方に教科書何ページかこっそり教えてもらったのは覚えているんだけどなあ。なにか珍解答してはないか今更ながら不安にもなる。

そして気付いたらもう放課後、つてくらい体から魂が抜けたかと思う程に無意識だった。それほど朝のホームルームでの中野先生の発言は、俺にとって衝撃的なものだったのだ。

俺は、どうしても軽音部に入ってみたかった。中学校の頃からずっと底知れない憧れがあった。

今までは趣味で音楽は沢山聴いていたし、ギターもやってきた。客観的に見て聴いてまあこの際上手いかどうかは別にして、それでも高校に入ったら軽音部に入ろうと決めていたのだ。誰かと熱く音楽について語りあったり、お互いの音を満足のいくまでぶつけ合ったり。みんなの好きなバンド、アーティストの音楽をカバーしたりコピーしたりして、そんな風に毎日沢山ジャムって。

そうしてスキルをあげていって、自分たちのオリジナルの曲を作っている、ライブハウスで観客にヘッドバンキングやモツシュモツシュ。そんな風に考えていたのだ。胸がはちきれるかと思うくらい憧れていた。

そうやって高校生活は大好きな大好きな音楽に埋もれて過ごすつもりだったから、今の落胆の程は察してもらえと思う。

「いやー…冗談だろ…?」

そう呟いて何度目なのかかもう解らないのだけれど、机に力なく突っ伏してしまふ。嫌にひんやりする机の表面はどことなく宥められている気がした。

机に向かつて力無くあうあう言っていると、どこかに出かけてきたのか梓が教室にとてとて入ってきた。

そういえば梓もあの時先生の言葉に驚きを隠さず俺と一緒に声をあげていたっけ。何だろう、梓もなにか探している部活があったのだろうか。

もしかして：軽音部？？だとしたら尚更惜しい。こんな娘と活動できないなんて、そうなるよりリストになかったのが非常に非情に悔やまれる。

「ねえねえ雨姫君、雨姫君」

話しかけてきた梓の表情は何故かとても明るい。何か良いことでもあったのかな。今朝は俺と同じで机に突っ伏してたはずなんだけれど。

もうなんかウキウキしているのが周りに空気にただ洩れしちゃっている。そしてよく見ると梓の両手にはパックの飲み物が優しく包むように握られてある。

「どっちがお好みですか？私今買いにいったら二つでできたんですっ」

そう言って学校自慢の一面いっぱいに広がる満開桜を思わせる満面の微笑みと共に差し出されたパックの飲み物というと、ちよつと目を疑うような物だった。

一つはオレンジと表記されたフルーツ系飲料だろう。爽やかな印象を与えるパックは流石。今すぐに口の中をオレンジの香りでいっぱいにしたくなる。

だがもう片方は一体なんだろう。

「マンゴーと餃子が出会っちゃいましたテヘ」って書いてあるんだけど。

あれ？嘘だよな？俺目、疲れちゃったのかな？あ、そっか今日シ

ヨック受けてそれできつと幻覚見ちゃってるとか？

だってこのカップルって成立するんだっけ？ってか出会っちゃだめなんじゃないの？そんな飲み物この現世に存在するのですか？ってかテへってなんだよ。大事な事だからもう一度言うけどテへってなんだよ。

でもまあ目の前に現物があるので、うーん：とにかく開発者を呼んできてくれないか。お茶でも飲みながら段階を踏んでゆっくり話がしたいんだ。

「あー：うん、じゃあ俺はそっちのオレン」

「やっぱり雨姫君はこっちなんだ！？流石、攻めるねえ」

と、ニコニコ顔で手渡されたパックの文字はもう俺には涙で霞んで読めないけど、きつとオレンジって書かれているんじゃないかな：。書いてるよね：？

静かに鞆にその怪しい飲み物を仕舞う。これは流石に今は確認することも飲むこともできない：。心が折れてしまいそうだ。

後日改めて挑戦してみよう。だめだったら：蓮時か愛に飲ませよう。うん、それがいい。

「そういえばさ、梓はなんか文化系の部活に入ろうと思ってたりするの？」

だって、あの時。梓はもの悲しげにしていたから。俺と一緒に声をあげてからは、どこか哀愁感が漂っていた。放課後になって、今になって漸く話すことができたくらいだった。

まあそれに関しては人のこと言えないんだけど。自分もだし、梓の落胆も相当だっただろうから話し掛けるのに気が引けたのだ。

「あー、はい。えっと：私、油絵とか絵画とか水墨画とか、欲張りですけど兎に角なにか書くことが大好きなんです。だから高校に入ったら絶対に美術部的な部活に入ろうと思っていたんですよ」

あはは：と笑って見せるその無理矢理作った笑顔に俺の心の奥深くの何かが触れた。自分でも正体の解らない焦燥感に心が焦がれる。何とかしてあげたい。取り繕った笑顔じゃなく屈託のない笑顔が

見たい。なんかもう自分の事は棚に上げてしまってもいい。いや、それくらいにっこでね。

梓は本当に美術部に入りたかったのだ。こんな哀しげな表情をしてみようほどに、だ。まだ実際に見たことはないけれど、この娘はきつと楽しそうに描き、素敵な作品を描くんだろうな。

なんとなく作業をする梓の姿や表情を妄想して、やっぱりその姿を実際に見てみたいなと強く思った。

「俺はさ、俺は音楽が好きなんだ。大好き。音楽がなかったら生きてはいけないって断言できるほどに、それほどに好きなんだよ」

「うんうん、いつもヘッドフォン付けてますもんね？私も好きだからよく付けてますけどね」

ほら、今も首にぶら下がってますよーと微笑みながら梓はヘッドフォンを撫でていた。

「うん。まあ：だから軽音部があったら是が非でも入りたかったんだけれど」

なかった。なかったのだ。軽音学部も、梓が望んだ美術部さえも。こんなにも切望していたのに。

そんな時だ。梓がなにか閃いたかの様で、ぱあああと微笑み、ウキウキした様子で前のめりしてきた。俺の机がミシミシと小気味良い音を奏でる。おいおい大丈夫か？俺の机。

「雨姫君、私良いこと思いついてしまいましたよ」

なんだろう、このとき不思議な体験をした。

頭の中にふわりと音楽が流れ込んできたような気がした。その音はなにかに形容する事は容易でなく、ただただ優しい音色。

その音楽と一緒に優しい色彩も頭の奥深くからとめどなく溢れてくる。様々な色が頭の中を彩っていく。合わさって淡くなって、薄くなって混ざって、濃くなって。

音楽と色彩が互いに混ざり合い、見たことのない異空間が出来上がってしまう。

これはきつと錯覚ではない、と思う。勿論根拠もなにもないのだ

けれど。

どんどん描かれる抽象画のような色彩と優しい音色は徐々に消え、薄くなっていく。そこには一つの映画を見終わった後のような心地よくてどこか淋しげな感覚だけが俺を取り残して消えてしまった。そして。

「ねえ、部活。私と一緒に作らない？」

なんとなく返答しようとしたのだがうまく言葉に出来なかった。意表を突かれた、とも違う気がする。けど放たれた魅力的な提案に心は確かに躍った。

「あれ？ねえねえ雨姫君、聞ってる？」

「あ、ああ。聞ってるよ、聞ってる」

「良かったらさ、部活一緒に作ろうよ？私と」

「で、でもさ。梓は美術。俺は音楽だろ？」

「美術と音楽の混合部活でさ！！それってなんだか面白そうじゃないですか？」

「まあそれは確かに…」

度肝を抜かれた。何を言い出すかと思えば部活を作ろうと言い出すのか。

でもこの提案には正直内心はワクワクしていた。この何も無い状況からのスタートは結構悪くない。というか嬉しい。その発想はなかった。

けど。美術と音楽が合わさって一体何をやるのだろう。いまいちピンとこないまま、梓は話を進めていく。

「私は絵を描きます。勿論雨姫君の作ったバンドのお手伝いもしちゃいます。」

「そ、そうなの？えっと…じゃあ…俺はバンド作るよ。後は…梓の手伝いってか、集まったメンバーと梓とでなにか作品も作ってみたかも」

そう言うとなんか？嬉しい！と梓は微笑んで手を握ってきた。ヤ

ばい、照れる。顔、今どんな色になってんだろう。

なんだかあっさり決まってしまったが、梓と一緒に部活を作る事になってしまった。マジでか。兎に角梓とこれからしなきゃいけないことを話し合った結果を要約するところだ。（というか主に俺が決めてしまった感が否めない。だって梓は話を脱線させてばかりで話が進まなかったのだから仕方ない）

1、活動内容を明確にする。

2、部活の名前を決める

3、メンバーを集める（とりあえず4〜5人は居たほうがいいと思う）

4、部活公認の為交渉及び手続き

最低限これくらいは早めにしっかり決めないとだなんて思う。

けれどとはっきりいつてまだまだ穴だらけなんだよねこの計画。空いている場所も機材も画材も恐らくは無いだろうし。なによりそんな怪しい部活に入りたい人間なんて…いないと思う。

っていうか気が付けばちゃんと部活化を実現しようと頭をフルに使っている。いつのまにか引き込まれていた。部活の魅力がそうさせてるのか、梓の力なのか。

状況は芳しくないけれど、だけどどこか間違いなく気分が高揚している自分に気付く。うまくいくもなにもまだなにも始まってないけれど、はつきりいつてもう既に楽しい。とあるRPGで、漸く銅

の剣を買えた時みたいな感じ。わかんないか。

「じゃあとりあえず部活の名前、どうしようか？」

「そうですねえー…あっ！芸術研究部はどうですかね？」

「ああいいねえ…ってちょまつ、音楽はどこに行ったんだよそれ」
「えーと…あっ！芸術とは音楽も含まれるのです」

うーん。うまく言いくるめられた感。しかも、あっ！って今思い付いただろ梓。

でも確かにその案は巧いかもしれないな。俺もなにか考えないと。などと考えていると聞き覚えのある声が聞こえてきた。これは偶然か必然か。この姫神高校で新しくできた友人、蓮時が都合よく現れたのだ。

「おお。どうした古音？？まだ残ってたんだな。」

蓮時はただ暇だったのかそうでないのか定かではないが教室には鞆を取りにきたらしい。

そういえば改めてみると蓮時は身長もあるし一重でかつこいこい。こいつは近々恐らく女子にワイワイ言われるのだろうとか考えてたら色々少し億劫になってきた。

「なあなあ蓮時、確か部活まだ決めあぐねていたよな？」

「まあ、そうだけど…って、いきなりどうした？」

「うん、これから俺ら部活作るから蓮時入ってくれるかな？てかいよね？おっけ決まりな！。よっしゃ決まり！」

なんか「ちよっ！」とか「説明してくれよ」とか滅茶苦茶聞こえるけど、空耳ダヨネ。

入部届けたるものはないけれど、一応簡易的だけどさっき梓とメンバー表を作成した。

なんだか落書きだらけ（その落書きとは完璧十割梓が書いたもので不恰好だけどそこに三人目の名前を記入する。まあ…すまん勝手に）。

「古音、雛墨さん、どうかせめてなんの部活なのか位教えてくれな

いかな？」

「あ、うん。そうだよね！雨姫君、もう櫛枝君にいぢわるしたら、めっだよ？えっとね、簡単に言うとは私は美術関係の部活がしたくて、雨姫君が音楽関係の部活がしたかったんですよね。で、お互い入りたい部活がなかったんです。それで、じゃあもう作っちゃおうかみたかった今なりましてですね！」

「部活の名前もろくに決まっていないうしメンバーも当然ながら俺と梓の二人しかない。これじゃ部活として認定されないかも、さてどうしようかって話をしているところで蓮時が丁度現れましたと」

「お前らむちゃくちゃだな！！！」

そう叫ぶように言うのと急に蓮時が笑い出した。蓮時がこんなに笑っているのは正直みたことがなかった。最初は嫌がってると思っていたんだけど、そうじゃなのかな？無理矢理誘ってみて正解だったかもしれない。誰だってこんな誘われ方や部活内容も定まっていないう部活なんて警戒するよな。

「はは、いいよわかった、やるよ。こんな高校生活の始まりも、うん。悪くないな」

そういつて蓮時はふわり微笑むとしかたねえなんてぼやきながら近くの席にどかっと腰をかけた。

勢いで三人目の部員を確保できてしまった。何気に順調。あと一人、いや二人は欲しいところだなあ。

因みにこの後、蓮時から実はドラムをやっていたんだと打ち明け話を聞いて俺は、バンドに一步前進できた喜びと一緒に神様の理不尽さと嫉妬で怒りに震えたのは：

そう、誰も知らない。

***1－4色　紅蓮の放課後（後書き）**

ついに動きだしました謎の文化系部活。

軽音と美術、うまく纏まるのでしょうか。

部活の内容が気になりますがこの躍動感、ちよつと中に混ざって活動したくなります。

*1-5色 瓶覗色の空景

今日一日で急に色濃く展開し始めた新しい高校生活。ずっとしたかったことをしょっぱなから阻まれ、それから机に突っ伏して絶望していたその日の内に救いの希望は舞い降りる。一人の女の子のたった一言で、だ。

青い春の神様はまだまだ俺を見捨ててはいないみたい。というかむしろ愛されてたりして。

まさか自分達で部活を立ち上げるなんて夢にも思わなかったから、今の状態が冗談みたいに笑えてくる。だってこんなのアニメとか漫画の世界だけだと思っていたし。

けれども、この状況はもしかしたらというか絶対、普通に部活に入って何か活動するよりも数段楽しいのかもしれない。

何もない状況から部活を立ち上げる、仲間を一から探す、部活名を考える等の体験は滅多に出来るようなことではないから当然貴重だし、なにより充実感が半端じゃない。本当にアニメとか漫画みた

いだ。
俺らはあれから段々空の青が薄く、色んな色が混ざり合って、そして赤みがまして焼けてきた空の様子が窓から見える教室で暫く話をしていたんだけど日も暮れてきたから学校を出ることにして、一秒だって同じ色じゃない、どんどん色合いが変わっていく橙色に染まった街にゆっくりと皆で向かった。

太陽の高さや雲の量や位置、流れ方や形でどうしてこんなにも色んな表情で魅せられるのだろう。昔から空を見上げる癖があるのだけれど一度だって空を見上げる事に飽きたことなんてない。

毎日違う空の様子と色に目を奪われ、何事もなかったように消え

てしまう雲と現れる雲に気持ちがすうつとなるのを感じた。首にかけてある音の流れていないヘッドフォンからはなにか綺麗な音が聴こえたような気がした。

帰り道、三人調度小腹が減ったし、まだもう少し話がしたいと意見が合致したのでとりあえず近くにあった某ハンバーガー屋に入つてまた少し話をすることにした。

「うーん、んんーどっちにしようかなあ…」

蓮時も俺もそれぞれの好みにあったハンバーガーのセットを頼み、会計を終わらすと梓がまだメニューを見て唸っていた。ああ、そうだった。こうゆうの迷う娘だったっけな。

「先に席とってるからなー梓」

コンビニの件の出来事を思い出し、耐えかねて少し笑ってしまった。今回は何と何で悩んでいるのかちよつと気になったけれど、あんまりちよつかいだすのも気が引けるし、そう声を掛けると何度か頷いていたので蓮時と窓際に空いている席を陣取る。

「なあ古音、さっき携帯触ってたけどもしかして誰か呼んだのか？」

「おお、なかなか鋭いな蓮時。うん、実は部活に誘ってみようかなと思ってる友達がいるからさ、さっき呼んだんだ。なんか近くにいたみたいだからまあ待ってればすぐ来るんじゃないかな」

「ふーん」

蓮時は片肘をつき、顎を手の甲に乗せて外を一瞥した。興味が無いような素振りに見えるけれど恐らく興味深々の裏返しなのだろう。まだ短い付き合いだけどそれがなんとなくわかった。

そのまましばらく蓮時と雑談していると来店した時になる音楽が店内に鳴り響いた。

すぐにこないとこをみるとなにか注文しているんだろう。

っていうかあれ？梓はまさかまだ悩んでたりする？これは期待大。

「雨姫ー、きたよー！」

元気いっぱい、満面の微笑みで近づいてきたその女の子は制服を着ていて、綺麗な薄い茶色の髪をアップにしている。ダッカールはラメラメでキラキラしている。

幼馴染の望月 愛だ。

「ああーもうあたしお腹すいたよー、あたしハンバーガーセットにもう1つハンバーガー頼んじゃったわえへへ」

相変わらずよく食べるなあと感心しているといきなり体にどんっと軽い衝撃が走る。ああ、愛が隣に座ったんだな。なんでこの幼馴染は俺に何かと体当たりしてくるんだろう。隣を見ると首を傾げて微笑む幼馴染。くそう：なんか、なんだかい匂いがするしなんか首傾げてて可愛いしどれだけ掻き乱されるんだよ俺。まあ結局全然嫌じゃないし許すんだけど。

そうこうしているうちに梓が注文を終えたのか、俺らの座っている席に向かって歩いてくる。

「あー、あずあずっ、どもども。あたしきちゃったよーん」

「あー、愛ちゃん。来てくれたんだあっ！わーい」

いやー女子のキラキラしたこの感じ、すごくいいよね。女の子同士が笑っていると世界が粒子レベルで華やかに色付くよね。ただのハンバーガー屋も梓と愛を店内に置くと特別に感じる。

あれ？てか愛はいつの間に梓と友達になっていたんだ？ちょっと気になる。まあ入学式からわりともう時間もたったし仲良くなってもおかしくないか。

そしてそれぞれが席にいて軽く雑談していると、注文したハンバーガーセットが運ばれてくる。美味しそうな香りがテーブルを包み込む。自然と涎が出そうになり、改めてハンバーガーの美味しそうな香りの攻撃力を思い知ったのだった。

因みにファーストフード店は極力避け、食べないようにしている。ハンバーガーは勿論美味しいしどちらかといえばかなり好きなほう

だ。大好きなんだけど、如何せん価格が高いのだ。その分を近くのスーパーで買う食費に回せれば結構買えてしまう。

一人暮らしで料理したりしているから、少ない費用で沢山買えるスーパーに食費を回したい気持ちになったりと、もう既にお金に関しては割と敏感になってしまった。

ああ、若干高校生なのにこの堅実さには涙が溢れてくるね。

だけれどこうやって友人達と夜ご飯を共にし、わいわい話をしながらというのはいわばP r i c e l e s s、大切な時間。こういう出費に関しては俺は惜しまない。

「えーと、こりやまた珍しいメンバーが集まったねえ雨姫。なににな、秘密会議でもするのかい？てかあたしにはなにか用事だったの？」

セットのポテトをモシヤモシヤと食べながら愛は此方を向き、ふわり微笑みを浮かべると首を傾げた。

そう、幼馴染みの望月 愛を部活のメンバーとして勧誘しようと思っと呼んでみたのだ。

「あ、あのさ。今日部活のリスト表渡ったよな？それでさ、ハッキリ言うとその中に俺が高校生活でやりたかった部活がなかった訳なのよな、俺も梓も。」

「あー、やっぱりそうなんだ？？なんか二人して朝のホームルームでびっくりして声上げてたもんね」

あれには流石にびっくりしたよーと愛は苦笑いしてみせた。

「うん。それでだいぶ落ち込んでただけど、梓からの提案でな、部活がないのならいっそ部活を作ろうってなったんだよ。所謂、軽音楽と美術の混合の部活。なんか伝わりにくいだろうけど現状そんな感じなんだ」

この話をしてる間中、梓は食べている手を止めて時々頷きながら聞いていた。そうだ、梓も新しい部活を作るのを切望しているんだ。普段のふわふわした印象を感じさせない芯のある眼差しは俺の言葉を静かに見守っている。

「でもまだ部活申請もしてないし、名前も実はまだ決まってる。メンバーも此処にいる蓮時と梓の3人なんだ。それで」

「それであたしに声をかけたって事なの、かな？」

俺の言葉が終わるのを待たずに言葉を被せてきた。愛の表情を見るも、うまく読み取ることが出来なかった。嬉しい？のか、なにか哀しい？のか。幼馴染だし愛のことはよく知っているつもりだったけど、見たことのない複雑な表情だった。

「あ、あの。私達は別に、ふざけているわけじゃないんです。やるなら本気でやりたいし、本気で楽しいことしたいんです。その仲間に雨姫君が愛ちゃんならって：」

「うん。ほら、愛は中学校の時に吹奏楽部だったし、確かコントラバス、ウッドベースしてたよな？：だから」

だから俺達と一緒に部活作らないか？そして一緒に楽しい高校生活を過ごそう。きっと楽しくなるよ。ってか、なるよ。うん、してみせる。

そう愛の目を見つめて言った。この言葉に迷いなど一切なかったんだ。

少しピリッとした空気のまま何分たっただろう。いや実はまだ一分もたつてなかったりした。そして間を繋げなくなった俺達は当たり前のように愛のハンバーガーセットのお盆に一本ずつポテトをそっと置いた。

「んな！？」

そしてよく見ると、俺の差し出したポテトが一番短かった。それも断トツの短さ。親指程の其れを梓と蓮時がしばし見つめれば此方へと視線を移し、凄まじいジトジト視線を投げかけてくる。さて、落ち着けお前ら。そもそもそうゆう問題なのか？ポテトの長さの問題なのか？？とりあえずその目をやめてもらっていいですか。

そして愛は俯きがちにお盆の端っこに置かれたポテトを眺め、ど

うしていいのかわからなそうに俺に視線を送ってきた。ほら、そうゆう問題じゃなかった。

「雨、雨姫のが一番短い……」

……………そうゆう問題だった。

「雨姫は、雨姫達はあたしのことを必要としてくれて、それであたしに声を掛けてくれたんだよね？」

「うん。それは勿論そうだよ？」

「そ、そんなの…あたしが断るわけじゃない……ばか」

「ん？今なんて言った？」

愛がなんだか小声で呟いた言葉をうっかり聞き逃す。ほんのり顔を赤らめてポシヨポシヨとなにか言ったのは聞こえたんだけど。わりと大事な言葉のような気がするんだけど。

「う、うるさいっつ。…わかった。いいよ、あたしも入るよその部活」

「「「本当に!？」」」

すごく嬉しかった。仲のいい幼馴染とも一緒に部活ができるなんて。梓と蓮時も嬉しそうに笑っている。愛はお盆に置かれた、一番短いポテトを啜えて此方を見ていた。宜しくね？と皆に微笑む愛をみて、ああ…誘ってよかったなと素直にそう思えた。

愛は中学の頃にウッドベース（コントラバスとも言う）を担当していて実はベースがすごく上手い。でもエレキベースは多分弾いたことがない。この愛の奏でるウッドベースの音色がとても好きで中学の頃密かに聴きにいったりしていた。愛はとても魅力的なウッドベースプレイヤーだ。いつか一緒にセッションしてみたいとなあと思っていた事が叶った。これで、俺が最低限欲しかった各楽器パートが揃ったからバンドができる。音が出せる。

「でもまあ入ったはいんだけどさ、まだなんにも決まってないんだよね？」

そう、まだ何にも決まってない。何せ今日発足した部活なのだからむしろ四人集まった事のほうが出来過ぎなくらいだ。

「じゃあじゃあ、部活の名前だけでも今皆で案を出し合って決めちゃいましょうか？」

梓がそう皆に提案すると全員頷いた。そうだ、まずは部活の名前だ。その部活の雰囲気と目的が一発でわかって、教師に認められるような、そんな名前だ。

「絵とか美術的なことしつつ音楽をゆるっと奏でる部」

「愛とその仲間達の団」

「思い切って：アニメ研究部」

「ちょ、おまえらまって！」

ってかおい、だれだ今アニメ研究部だったの。どこで思い切ってるんだお前。うん、間違いない蓮時だ。あれー、蓮時ってこんなに面白かったっけ？ いやちょっといいなっ、正直入りたいなって思っちゃったけどさ…。

愛に至ってはもはや部活名かどうか怪しいよ。なに勝手にe t c括りにしてんだよ、人をe t cにカテゴリ分けするなっの。その他扱いはごめんだ。

「梓のは名前ってより目的だよな。でもなんか長いけどイメージしやすい」

そう言う梓はほんのり照れていた。けど本当にいいところについてる。ゆるっとするのがなんか俺らっぽい。

「古音はなにか、考えたか？」

「うーん…ごめんまだ。でも梓のをヒントに今考えているとこだよ」
また静かな時間が流れた。コーラをストローで吸ったりしながら

夜の帳に包まれていく街の景色をなんとなく眺め、そして頭に浮かんだ1つの部活名を発表するのはなんか恥ずかしさに満ちていて躊躇してしまった。

「あー：じゃあさ、色彩音楽部って、どう？」

「あ：その名前すごくいいですね！」

「雨姫、それすごくいい名前なんだけど、これは暫く大喜利方式で楽しむくだりだったんじゃないの？」

「うん。俺もいいと思うよ」

「なっ、大喜利方式だと？しまった：もっとボケればよかったのか。これは今晚一人反省会だな：大いに悔やまれる。多分今日寝れない。けれども、みんな気に入ってくれたみたいだしちょっと嬉しい。」

「てか、略して色音部？なんかそれっぽいそれっぽい！」

愛は満面の微笑みを見せると、梓と蓮時となにやら興奮した様子で今後の活動について語っている。

思い描いている美術活動と音楽活動の両方の大切な要素を取り込んだ俺達の部活は「色音」という息を吹き込まれ、鮮やかに色めきだす。

早く梓の作品に触れ、愛と蓮時の音に触れたい。混ざり合う音と色は、きつと何にも喻える事のできない気持ちにさせてくれる。

それは昔からずっとずっと切望に渴望を重ね重ね希っていたもの。

「色彩音楽部、色音：か。」

ぼそっと喜びを噛み締める様に呟く。気付けば暮れていく街の色は瓶覗色から青濁、瑠璃色に染まっていた。

そして目の前に広がっている楽しそうで夢の詰まった会話の中に俺も飛び込むことにした。

*1－6色 山吹の名簿

夜の帷は街をゆっくりと包み込み、家の電気も街灯もぼつりぼつりと灯り始める。

蠢きだした春の虫達も街灯の光を求めて電柱に集まってきていた。あれからまた数十分話し込んだ。勿論色彩音楽部について雑談も交えつつ。

結果、明日試しに早速先生と生徒会に部活動の申請をしてみることにした。

そして現在店をでて少し歩いた交差点の前。田舎なので、この時間になると大通りなんては名ばかりで人通りも少なく自動車もあまり走っていない。自転車がコンビニでも目指してだらだら走っているくらいのものだ。そこで最後の雑談後、別れの挨拶を交わした。

俺と愛は帰る方向が同じだから一緒に帰ることに。そして梓と蓮時も途中まで一緒とのことでここで今日はお開きだ。

「それじゃあまた明日な古音、望月。めまぐるしかったけど楽しくなりそうだな」

「気をつけてね雨姫君、愛ちゃん！今日はありがとう。また明日学校でねっ」

「うん、また明日なー」

「あずあず、蓮、ばいばーい」

暗い交差点でのお互い交し合った別れの言葉に少し名残を覚えるも、手を振り別れる。

すっかり暗くなった帰り道を歩きだして、ふと隣の愛を見ればなんだか機嫌良さそうにしている。雰囲気わかる。部活、きつと楽しみで気に入ってくれたんだなと思うと此方まで嬉しくなった。

「愛、今日はいきなりだったけど、その：色々ありがとうな」

「んーん、全然大丈夫だよっ。まあ確かにいきなりだったけどね。でもでも楽しそうだし、あたしも楽しみだよっ！明日から忙しいしなんだか青春しちゃうねえっ？」

「うん、本当楽しみだよ。無理だと思っていた念願の部活出来るし、何気に興味あった美術もできる。自分達で部活作れるとか、うきうきしないってのが嘘だよな」

「あははは、そうだよね。色音部かあ：あたし達の部活」

そう呟けば、星も疎らな夜空を愛は儂げに見上げていた。

誘ったからには後悔とかつまらない思いはさせたくないあなante、夜空を見上げる愛の横顔をちらりと眺めればそう思った。

「あれ、そういうえば愛は自分の楽器って持ってたっけ？」

「あー…。いやー。えへへー」

そういつて決まりが悪そうに笑って見せた。

ああ、持ってなかったんだっけな。幸いにも俺のアパートにベースは一本あるからそれを貸すとして。愛はエレキベースでも大丈夫なのかな？

「うん。あたし多分エレキベースでも大丈夫だと思う。友達の手借したことあったし」

「ん。なら俺んとこに一本ベースあるから、使っていいよ？」

「えっ、ほんとにっ？うわぁ嬉しい。ありがとう雨姫」

「でも、エレキベースだよ？大丈夫？バンドでやるなら一本はエレキ欲しいとこなんだけど本当は愛、ウッドベースとかのほうが」

「うん。まあ自分のベースもいつか買いたいって思ってたからいい機会かも。今度買いたいから、その時はベース選び付き合ってよ？」

断る理由が全くない。幼馴染の買物物は苦になるはずもない。ああそうか、買おうと思っていたんだ。愛に合うベースか：楽器屋に行くのは好きだし余計に楽しみだな。

「ああ、今度みんなでいこう。俺もちょっと買いたいものあるし」

「あー。うんそっか、そだね。みんなでいこうみんなで」

「あ、そうだ愛。なにか演りたい曲とかあったら考えといてな？ 最初はコピーしたりしてバンドの手応えとか感じたいからさ」

「うん、わかった。それって何でもいいんだよね？ 迷うなあ…」

ボカロからも選んじゃおうかなあ？ と嬉しそうに考える姿を見て早く演りたくなった。勿論梓からも色々教わって描いてみたいって気持ちも加速して。

「俺も何曲か選んでくるから。アンプは…まあ部室あてがってもらってからでもいいか」

「うん。部屋もらえなかったら置く場所なくて大変だもんね。さてさて雨姫はなんの曲選ぶかなー」

それに関しては選びきれない自信がある。何故ならそういった妄想は中学校の頃から盛んに行われたからな。脳内サミットの結果は毎回違うし、色んな俺が異論反論で話し合いにならない時もある。いや、なにを言ってるんだろう俺は。

「そうだな、演りたい曲在りすぎて絞りきれないかもなんだよ。それでも選んではくるけれどもなあ」

「ねえねえ、ボカロやろうよボカロ」

暗がりの街頭の下幼馴染みの愛の言うボカロとは、VOCALOIDと呼ばれるパソコンのVOCALソフトによるもので、わかりやすいところで初音ミクや鏡音リン、レン巡音ルカなどのキャラクターソフトがある。そのVOCALOIDを通じてネットに音楽を投稿し今日は賑わいを見せている。

某サイトではかなりの盛り上がりを見せていて何十万再生を記録している知る人ぞ知る音楽である。

因みに俺もそのVOCALOIDには興味があって、自宅のパソコンを使ってしょっちゅう検索しているし、作っている人をプロデューサー略してPとなっていて、色んなPが様々な楽曲をUPしている。興味が尽きないし手を伸ばさなければわからない、それこそ本当に知る人ぞ知る音楽なのだ。

「そうだな。decod27さんや、えこ。さんの楽曲は是非ともや

りたいから多分その2人の曲からは選ぶよ。特にえこ。さんの曲はぶっちゃけ全部演れる。それくらい聴き込んだし、音楽もはいのことなさんの歌詞も好きだしな。deco27さんの曲もできたら演りたいな。機材ちよつと足りないかもだけど」

この会話が通じたのか、愛は酷く嬉しそうな微笑みをみせる。昔からの付き合っただけで愛のこういった笑顔はなかなか見れなかったりする。本当に純粹に嬉しいらしい。

そうして色んな話をしていく内にお互いの帰り道の分岐点に立ち、簡単な別れの挨拶をする。

「じゃあね、雨姫。また明日学校でね」

「うん。今日はマジでありがとう。興奮と反省で今日は寝られそうにないわ」

「あははは…ばか」

笑って別れる。一応見えなくなるまで愛をみていたんだけど、ちらりちらりとたまに振り返っては手を振る愛はやっぱり俺のよく知る愛だった。

そして帰り道を歩きながら演りたい曲についてぼんやり考えた。楽曲は勿論大切な選択だけれど、あのメンバーで演るってのがなにより物凄く楽しみで。

そこにうまく梓の美術要素が上手く加われれば他では類をみない新しいバンドが生まれるんじゃないだろうか？そして梓の歌声も聴いてみたい。

そんな妄想を延々と考えながら帰路についたのだった。

そして次の日の放課後の時間まで一気に省かせてもらう。本当はあったはずの俺のアパートでの生活とか授業や休み時間のたわいもない描写はまたの機会にでも。

まああまり知りたいという物好きはなかなかいないんじゃないかと思う。

~~~~~

「さーて、雨姫くん、さあさあいよいよですぞ」

本日最後の授業、物理が終わって嬉しげにこちらを勢いよく振り向く梓。勢いよすぎてちよつとびっくりした。

いよいよというのはつまりはあれだ、先生もしくは生徒会に部活の申請していくという素敵イベントの事だ。

正直こんな得体の知れない部活動は認められなさそうだなって未だに思ったりもする。ラノベやギャルゲー辺りのセオリーだと大体最初は突っぱねられたりなにか問題が発生したりするものなんだけれど。うーんどうかな。

「じゃあとりあえず行ってみるか。まず生徒会室が妥当かな」

机の横に掛けてある鞆を肩に背負いこんで教室をでると、帰る準備も整え終わったのかととてーと梓も小動物さながらついて来る。蓮時と愛は掃除当番の後なんだったか、用事があるとかで少し遅れるとの事だったのでとりあえず梓と二人で行くことになった。

「今日の昼休みに先生から申請書貰ってみんなで書いたやつ持ってきた？」

「はい、勿論ばっちり持ってきてますよー」

ふわふわと微笑みをみせながら梓は鞆からひよこつと用紙を見せてる。申請書を書く時も例の如く梓が落書きしたがって大変だった。結局ルーブリーフを与えてやることで事なきを得たが。

生徒会室の前までちよつと距離があつて気持ちを落ち着けようとしたんだけど、これは少し緊張するな流石に。

「そういえば梓は生徒会長どんな人か知ってるのか？」

「あ、はい。直接会ったことはありませんが、とても綺麗な方だと聞きましたよ？」

梓から聞いたところ生徒会長は女子。容姿もよけりゃ秀才で性格もいいらしい。才色兼備というわけだ。さぞモテるんだろうからそ

の美貌を是非とも拝見したいところだ。まあ今から行くんだけれど。梓と雑談しながら生徒会室まで到着するのにさほど時間はかからなかった。

緊張で軽く震える手でいざノックしてみると中からは静かな声で返答があった。

「どうぞ」と言った本人は生徒会長かはわかりかねるけれど、どこか透き通った綺麗な声だった。

「失礼します」

生徒会室の中は四角く机を並べて会議出来るように配置していた。本棚にある大量の資料は卒業生の軌跡や会議などで使ったりする資料などで埋め尽くされている。

「えっと、一年生ね。何か用かしら」

そういつて四角く間取られた机の一角で資料を見ていたのか何枚か並べていた。彼女がふわっと顔を上げた瞬間どこか胸の奥が反応した気がした。そして彼女も俺の顔を見た瞬間驚いたような、微笑んだようなそんな表情のいなった気がした。ただの勘違いで思い上がりなんだろうけれど。

長めの髪を片手でさっと整え微笑して首を傾げている。パッチリした目で凄く可愛いらしい顔は男女問わずこの姿にときめいてしまうのではと思った。

セーラー服の上にベージュ系カーディガンを着ていてそれがとても良く似合っている。

そしてセーラー服やカーディガンを着ていてもわかるくらい胸が大きい。もう、たゆんたゆんだ。梓も愛もわりとあるほうだと思っていたけれど。とか考えてたら頭の中を覗いたかのように梓が小突いてきた。なんだお前はエスパーか。

だが生徒会室のパイプ椅子に座っている彼女は天使のように兎に角可愛い。

「えっと、今日は部活動の申請書を持ってきました」

「ん、てことは新しい部活動を認定してもらおう為にきたのね？」

「はい」

彼女のそばまで梓と歩いていき、作成した申請書を渡す。彼女は受け取った紙をゆっくり読んでくれている。その時間は妙に長く感じってしまった。

「雨姫くん、私なんだか緊張しちゃって。大丈夫かなあ」

梓は俺に小声で耳打ちして心配そうに見つめている。

ふわふわした雰囲気は相変わらず。頭撫でてやりたい衝動に負けてうっかり撫でてしまった。

「はうっっ？」

目を見開いてびっくりしていたけれど安心したのか目を細めてあげがとうと声には出さずに口を動かした。

「えっと、じゃあ仮に部長さんは……どっちなのかな？」

これは既にハンバーガー屋での雑談で決まったことである。色音部の部長は雛墨梓だ。

「一応、わ……私です」

弱々しく手を挙げる。なあ、其処までビビることないと思うんだけれど。でもまあやっぱり生徒会ってお堅いイメージ確かに強いしな……。

「名前は……雛墨さんね。実は私は会長じゃないの。二年生で副生徒会長をしてる、水無月と申します」

水無月 秋乃と名乗った一つ上の美少女は終始落ち着いた雰囲気です、此方を安心感で包み込んでくれる。それでいて何故か懐かしく感じるそんな空気感だ。

「あのね、とりあえず部員は五人からでないと受理されないみたい。それに顧問の先生も必要みたいだね」

今集まっている部員は4人、顧問の先生にはまだ相談していない。やはりダメだったか。流石にスルスルと都合よくは進まない。

「でも顧問の先生はもしかしたら部活していない先生も結構いるから、大丈夫かもしれないけれど……どうかしら、難しいかもしれないわね」

梓はほんのり泣きそうな瞳を此方へ向けてくる。その瞳にはどんな意味を込められているか、伝わった気がした。任せろ、と自信满满には言えないけど頑張るから、そんな顔すんなよ。

「じゃあ、部員をもう一人、あと顧問の先生を見つければ部活動は正式に認定されるって事でいいんですね？」

「そうね、最低でもその条件が揃えば恐らくは受理されると思うわよ」

活動内容とか色々審査されると思うよと呟けば困ったように水無月さんは静かに微笑んだ。

いっその際認定されなくても勝手にやっちゃうかとか考えてしまったけれどそうもいくまい。なんとかなるならなんとかしたい。

「んー…そこは水無月さんのお力添えでなんとかありませんかね？」

「えっ、私？」

「部室となる現在使っていない部屋とか知ってたら教えていただきましたいし、顧問になってくれそうな先生も紹介してくれたら凄く助かります」

「うーん…後輩の力になるのは各かではないのだけれど…。わかったわ、一応探してみるわ」

「ほ、本当ですか!？」

「余り過度に期待したりしないでね？」

水無月さんがそうふわり呟けば微笑んで首を傾げている。そんな彼女の姿は粒子レベルでキラキラしてた。なんの変哲もないただの教室でパイプ椅子に座って微笑んだだけなのに。思わず告白してしまいそうになるくらい絵になっていた。

「友達にも聞いてみるよ。えっ…と、色彩音楽部。部員集まるといいわね」

「そこまでしてもらっちゃっていいんですか？」

「いいのよ。古音、雨姫君」

名前を呼ばれた時に何かこう、意味ありげな違和感を感じたのは

やはり気のせいだろうか。

でも見ず知らずの一年生に異彩を放つ部活に対して此処までしてもらえとは思わなかった。後日お礼をしにまた来よう。決して水無月さんをキュートな姿を見て眼福にあやかる為ではないからな。

「それでは今日はこれで失礼します」

「水無月先輩、ありがとうございます。本当に助かりましたあ」

気付けばほっと胸を撫で下ろす梓の姿があった。安心感で表情も和らいで、どことなく嬉しそうだ。

そうして笑顔で手を振る水無月さんを背に梓と生徒会室を後にした。

まあこの時の俺は、数日後に旧校舎の一室の部室を頂いた上に顧問の先生がいきなり登場することは知らない。

そして、色音部の部員名簿に「水無月秋乃」という名前が追加されていることも。

## **\*1ー6色      山吹の名簿（後書き）**

お名前を書かせて頂いたボカロPのd e c o \* 27さんとか。さんにはネットを通じて名前と楽曲名の引用許可を頂きました。ここで改めて御礼申し上げます。

どちらもすごく胸に染み込むメロと詩で、大好きです。毎日聴いてます。

これからまたに登場させたいと思っています。



## ＊2－1色　　紅梅ストリングス

生徒会に部活動の申請をしたあの日から数日後、学校へ登校すると色音は正式に部活動認定されていて、旧校舎にある空き部屋を部室として使えることになっていた。

そして現在同日放課後、水無月さんに呼び出されて今は立入禁止となっている旧校舎の屋上へと繋がる階段を上がり、入り口のドア付近に二人つきりという状況だ。

「えーっと、水無月さん。聞きたいことが山ほどありますが、まずはありがとうございます：で、いいですね？」

「べ、別に古音君の為に私が入部して規定人数揃えたんじゃないんだからねっ」

友達探したけれど見つからなくて、それで何となく私にも責任もあるなあって思ったし、ちょっと楽しそうだし：と、語尾にいけばいくほど声量が下がっていったので最後らへんは何を言っているのかあんまり聞き取れずにいた。ごめん水無月さん。けど可愛い。

「でもでも、私勝手に入部する形になっちゃったけれど迷惑じゃなかった？　なんだかごめんね」

「いや、とんでもないです。大歓迎ですけど、本当に良かったんですか？　責任とか感じることに、全然ありませんよ」

そう言うとき水無月さんは少し目を逸らした。というか一瞬どころなく少し寂しげな雰囲気を感じたのは勘違いだろうか。

「申請書見て楽しそうだなって思ったのは本当なの。だから入部を決めたんだよ。良かったら古音君も他の皆さんも仲良くしてくれると嬉しいな」

そんなの当然だ。こちらから土下座してお願いしたいくらいだ。生徒会に訪問したあの日の後、友人に聞いたら生徒会副会長、水無月秋乃さんはやはり有名だった。可愛さが半端じゃないからな。けれどそれだけじゃなくて家柄も裕福らしく、家系が代々神主をやっ

ていて、大きな家に住んでいるらしい。その水無月さんと部活を一緒にやるという旨をクラスの友人達に伝えたところ半狂乱になったことから学年問わず人気らしい。

「それなら、改めて宜しくお願いします水無月さん」

右手を差し出し握手を求めると彼女も笑顔で握ってくれた。暖かった。

「私が二年生だからって別に気負いしなくてもいいからね？宜しく古音君」

そう言うとは可能な限り瞳というファインダーを通して余すことなく水無月さんの姿を脳内保存しておきたくなるような微笑みを浮かべて首を傾げていた。勿論既に保存済み。

「さ、それじゃあさっそく部室にいこっか。片付けとか配置とか色々やらなきゃね」

くると振り返れば綺麗な髪からふわっといういい香りがした。そうして階段を軽やかに降りていく彼女の姿はやっぱりどこことなく懐かしいような、愛おしいような：兎に角一枚の絵にしたくなった。

「あっ、そうだ。：ごめんやっぱりなんでもない。でも君には私のこと、出来れば名前と呼んで欲しいな」

階段を数段降りた所で俺を見上げながらそう言うとは今度はゆっくり降りていった。

彼女の言葉には深い意味が込められている気がした。彼女が言いかけて言えなかった言葉の意味を考えてみたけれど、俺の足りない頭では全くわからなかった。

そして生徒会で初めて出会った時から感じる些細な違和感は未だに胸のどこかに引っかかったままだった。

ゆっくり降りていく彼女を眺めていたら「ほら早く、部室でみんな待ってるよ。一緒にいこう」と声をかけられたので思考するのを一旦止め、一緒に部室へと歩を進めた。

~~~~~

放課後、屋上の入り口から歩いて数分。今は我が色音の部室だ。中々広くて、最初入ったときにはよくこんな部屋借りれたなと思ったくらいだ。秋乃さんすげえです。

部室にはもうみんな集まっていた。真ん中に机を二つ並べて簡易テーブルを作ってこちらを見つめている。

「此方の女性が5人目のメンバーの水無月秋乃先輩。この部室も秋乃さんが用意してくれたんだ」

梓も愛も手を取り合って喜んでいいる。蓮時もちらりと此方に視線を向ければ無邪気に微笑んでいた。

「えっと、初めまして。水無月秋乃と申します。急な入部となってしまったけれど、皆さん仲良くして下さい」

秋乃さんがぺこりとお辞儀をすると、小さく拍手が起こった。「じゃあさじゃあさ、みんな自己紹介しようよ。折角だからさっ」

愛が設置された机をバンッと両手で叩くと立ち上がり、笑顔を振りまき提案する。それは良い。是非ともやろう。

「じゃあ言い出しっぺのあたしから自己紹介しまーす。望月愛もちづきあいです。中学の時からベース弾いてまして、色音ではベースを担当したいなあと思っている所存です、はい」

みんな「おおー」と声を洩らした。そうか、皆愛がずっとベース弾いてたの知らないんだっけか。

「じゃあ時計回りで次は俺だな。名前はきしえだれんじ櫛枝蓮時。中学の時はバスケットをしていた。えーっと、ドラムセットが家にあって、叩いてみたらハマってしまっから密かにドラムを練習してた。色音のドラムを担当したい所存です」

くっ……。完璧だなこいつ。しかも愛の所存かぶせてきたし笑いでいけるってか。

色音部女性陣からはドラムについてあれこれ質問を受けていた。

「櫛枝君、ドラムセットもってこれるの？」

梓も興味津々に聞いている。確かにドラムセットは吹奏楽から借

りる訳にはいかないしな。

「まあ持ってくるしかないだろうな。もう自分のドラムだし構わないよ」

かなり助かる。運ぶ際は手伝わねば。結構運ぶの大変なんだよドラムセット。姫神ロックフェスの裏方手伝いで何往復もしたのを思い出し、何故だか身体の筋肉が痛くなり俺は苦笑いした。

あ、蓮時の次は俺だ。自己紹介ってのはいつやっても慣れない。妙にくすぐったい気持ちになる。恥ずかしくてあんまり好きじゃない。

「じゃあ次は俺か。古音雨姫です。ギター担当したい所存です。えーと：始めたのは中学の時に、とある音楽に触れてから影響されたのがきっかけかな」

「え、古音君ってギターやってたの？」

身を乗り出してきた秋乃さん。俺がギターやってたのがそんなに意外でしたか。でもその食いつきには嬉しさを覚えた。

「そうなんだあ。古音君が激しくギター弾いてるとこ早く見てみたいな」

秋乃さんに見られると若干恥ずかしい。弾いてる時は無心、夢中状態だけれどなんとなく恥ずかしい。実際にそうになったら恐らくぐだぐだになりそうです。

因みに使っているギターは臙脂（黒みがかった赤色）色の木目調レスポールと木目のテレキャスターの二本だ。中学校時代に学校に内緒で沢山バイトして自分で買った大切なギターだ。

実を言うと本当はもう一本ある。これも臙脂色だが、レスポールと違って赤や黒など虎の目状になっているセミアコだ。

今住んでる所の近所の兄さんにロックのなんたるかを教えてもらった時に譲ってもらったものだ。大切にしている為、普段は手入れだけしてあんまり弾かない。部屋の中のハードケースに入っている。

「じゃあ次は私だね。雨姫君の次かあ、部長とか柄じゃないしなんだが緊張しちゃうな。私は雛墨梓と申します。楽器は全然できない

けれど、なにかやれることがあるならば是非やりたいです。えっと：あと、私は絵を描くことが大好きです。水墨、油絵、抽象画や絵画を描くことが生きがいと言うか、私ってゆう存在を自分で出来る唯一の表現方法だと思っています。この教室で小さなアトリエを作れる目処が立って本当に嬉しいです。隣で皆が音楽を奏でて、それを私は絵で表現したい。音楽と色でスタンダードな表現の一つ、いや二つ上の表現が出来ると思うんだよ。えへへ、照れくさいんだけど、これから皆宜しくね。楽しく過ごしていこうね」

ちよつと驚いた。梓がこんな風に考えてくれていたなんて。あんまり心の中は聞けたり見えたりするものじゃないから、初めて知った。俺は俺で梓と部活を作ろうと決めた日から様々なことを考えたりした。

同じ様に梓は梓で沢山の想いを馳せて、沢山色音の事を考えていたんだな。すごく心に響く話だった。どうしよう、まだ胸がドキドキしている。隣でちょこんと座ってふわり微笑んでいる梓に俺の激しく脈打つ心臓の音が聞こえてしまっていないか、少し心配になってしまった。

「最後は私ね？二年生の水無月秋乃です。私のいきなりの登場に皆戸惑ったかしら。ごめんね。けどこの部活に魅了されて、一緒に活動したくて入ったの。本当よ？因みに楽器はピアノとヴァイオリンをやっているわ。家で習い事として母から薦められてから今でもやっているの。自慢じゃないけれど、コンクールでも受賞したことあるから、色音でも一応少しは役に立つと思うので宜しくね。あと、絵も描いたりするのは私も好きだから梓ちゃん、是非教えてね？一緒に素敵な絵画を描きましょう。こんなのですが宜しく願いします」

隣で梓がうんうんと反応し、嬉しそうに此方を見て何か訴えている。わかってるよ、良かったなと頭を撫でると目を細めて微笑んでいた。

ってか、え？ピアノ？ヴァイオリン？秋乃さんはお嬢様なのかな

やっぱり。ってか楽器できたのか。やばい、なんか基本的なレベルが段違いな気がしてきた。こんな部活に在籍していいのかな？色々と心配だ…。

ピアノやヴァイオリンが加わるとなると音に厚みが出るしアレンジの幅も広がる。これはかなりでかい。そしてかなり嬉しいポジションだ。秋乃さんには感謝しっぱなしだな。

「これでひとしきり自己紹介は終わったな。なんかぐっとやる気でてきちゃったわ」

「あたしもだよあたしも！溢れ出るあたしのやる気はもう止まりませんぞ雨姫さん」

自己紹介が終わると俺らはゆっくり目を合わせ、ずっと思っていたであろう皆の意思が一つに纏まる。

「とりあえずまずこの部屋片付けない？」

誰かが言った言葉に全員が激しく同意する。ってかやっぱり皆同じこと思っていたっぽい。結構味あるよねとか渋いよねとか聞こえるけれど無理がないか？意味不な像とか置物があるんだよね。このままじゃまともに機材や画材や休む場所を作れないからな。今日は全員で掃除と片づけだ。運び込まれた入らない物があるからそれらを寄せればかなり片付くな。

それから全員で時間をかけて部室を片付けた。途中で脱線も結構あったけど皆でやると楽しくてすごく捗った。

段々と形になっていく部室にそれぞれの想いを投影させ、片付けが終わる頃には明日何を持ち込もうかなんて笑いながら話した。何にもない殺風景な教室にはもう既に俺らの学校生活の要が詰まっていた。

さて、明日は各自楽器や画材を慌ただしく持ち込むことになりそうだな。俺はギターとアンプ、それにギターの設備備品とかエフエクターも持ってこなきゃな。うん、明日も忙しくて充実感に心を躍らせる事になりそうだ。

五人の音と色が絶妙に重なりあう日はそう遠くじゃなさそうだな。

*2—2色　　白緑ルーズリーフ

太陽がいつもと変わらない方向から昇り、街を照らし込む優しい光は今日も変わらずやってきてくれた。

昨晩は学校に持って行く為の機材とギターを見繕って玄関に用意した。前の日の内にやっておかないと当日でんやわんやになってしまふからな。

あと早めに出ないと重くて間に合わなくなりそうだし。

楽器を持っていく準備はとても楽しくて、遠足前の子供みたいなテンションになっていたと思う。だってなかなか寝られなかったし、軽く寝不足気味だったけれど前の晩に弁当も作ったし、今朝サーボマグに梅昆布茶も入れて準備が済んだし、いい時間になってきたからそろそろ学校へ向かうとする。

玄関に置いてあったギターケースを背負いこむと、くるっと振り返って誰も居ない部屋に「行ってきます」と言う。これは身に染み込んだ習慣なんだろうな。

少し錆びた匂いのする階段を降りる。いつものようにiPodを操作し終わるとポケットに入れ、ヘッドフォンを装着し、音楽を流す。朝は低血圧のせいかな、酷く眠いけれどこの瞬間は結構お気に入り瞬間だ。

iPodから流れる音楽を楽しみながら歩いているといつかのコンビニで梓がいた。今日は話しかけてみようか。

ヘッドフォンを首にかけて中に入るとコンビニの入店音が流れる。憧れの瞬間にちよつと胸が熱くなった。梓はパックの飲み物とサラダが綺麗に陳列された棚の前に立っていた。

「よっ、おはよう梓」

「うひゃあっ、ああびっくりした…雨姫君、驚きましたよお、もう。おはよう御座います」

ふわっと振り返るとゆるくかかったパーマの髪と、女の子特有のいい匂いが舞い踊る。朝からちよっと幸せな気持ちになる。

「あ、雨姫君早速ギター持ってきてるねっ。うん、なんか格好いいなあ」

俺の背中に背負いこんでいるギターに気が付けばあっと微笑んで、嬉しそうに側にくる。

「おぉー…」と唸りながらケースをさわったりして、やっぱり小動物みたいで可愛い。

「昨日帰ってから早速準備したんだわ。もう心躍る思いで待ちきれなかったんだよね」

早く弾きたい。早く部室を整備したい。早く梓に絵を教えてもらって部室を彩りたい。そんな気持ち。すごく充実した良い感じ。

「もしかして雨姫君昨日ワクワクして寝れなかったんじゃないですかあ？」

口元を抑えてこちらを見つめてくる。ああその通りです図星ですよと言うと「えへへ、やっぱりね」と笑ってみせた。うう、見透かされたようでなんか恥ずかしい。

「いいからそれは置いといて、梓は何買いにきたの？」

内心この朝コンビニイベントに心躍る気持ちだったりして。しかも女の子と二人でだなんて。そんなちよっとドキドキする気持ちを隠すように問い掛けた。

「あ、今日はサラダ食べたいなーって。ついでに飲み物も買いにきました」

「もしかして悩んだりする？」

「よくわかりましたね、実はこの和風サラダと、コーンが入ったこのサラダで悩んでたんですよ」

ちらりとこちらに見せた二つのサラダはみずみずしくシャキツとしてそうで美味しそうだなど印象を受けた。

「俺ならそうだな、和風好きだし和風サラダかな」

「和風サラダですか、和風サラダも美味しそうですー…」

でもコーンが…と名残惜しそうにコーンのサラダを眺める梓に、
「そろそろ選ばないと時間がさ、ほら」とさり気なく唆す。

「あっ、本当だ。じゃあ私これにします」

コンビニの時計を見ればまだ若干余裕はあれどぼちぼちいい時間
ということに気付いたのかサラダを手にとり、近くにあったパック
のミルクティーを持ってレジへ向かっていった。俺もなにか買いた
い衝動を抑えて梓の会計を待つ。

コンビニのレジ横の肉まんピザまんを見てたら涎が垂れそうにな
って慌てて口元を抑えていたら梓に見られてた。くすつと微笑む梓
を見てつられて笑ってしまった。恥ずかしいけれどなんか、いいな
あ。これ青春っぽい。

程無くしてコンビニを出る。学校へと向かって梓と歩きながら気
になる事を聞いてみた。

「結局サラダはどっちにしたの？」

「サラダですか？これにしましたっ」

がさごそとコンビニの袋に手をつ突っ込んで取り出したサラダのラ
ベルをよく見てみた。

「ええええっ、なにそれネバネバサラダ!？」

少しは期待したものだが見事に期待通りだったのでちょっと大き
い声で突っ込んでしまった。朝の登校してる同じ制服の人達や違う
学校の生徒がこちらをちらっと見ていた。ごめんなさい。

でもまた全然違うの選んじやったなこの娘。何故二択問題なのに
三択目を見つけて解答しちゃうのかな。

堪えきれず吹き出す。笑いが止まらない、ツボに入ってしまった
みたいだ。そんな俺をみて「なんでそんなに笑ってるんですかあー」
とあわあわしながら次第に梓も笑いだし、腹筋がちよっと痛くなっ
たくらいにして学校へと足を進めたのだった。

~~~~~

次第に集まる生徒。ホームルームを終え、始まる授業。眠くなる春の暖かな陽気の中各教室では様々な授業が展開されていた。

机に肘をつき、眠気と格闘すること数時間。待ち焦がれた放課後はあっさりやってきた。何か楽しみにしていると思われる時間が早く感じる。相対性理論に通ずるんじゃないかと考えてたら梓、愛、蓮時がぞろぞろと俺の机までやってきた。

「古音、春の陽気でゆっくりしてるのはいいが、そろそろ部室いいないか」

「雨姫。早くしないと置いてっちゃうからねー」

机に突っ伏している俺のほっぺたを愛の細く伸びた綺麗な指でぷにゅと突っついてる。「うりうり」なんて言いながらただだけ笑顔なんだよ。そんなに突っついてほっぺたの形が変わっちゃったらどうすんだ。

そしてその愛の後ろで微笑ましそうに見てるんじゃない蓮時、いから早く助けてくれ。

「ええい、やめいやめい。愛、分かったって。準備は出来ているから、もう行こう」

机の横に掛けてある鞆を肩に背負い、ギターケースと他の機材は教室の後ろの方に置いていたので取りに行く。

ギターケースを背中に背負いこんで教室を出ると梓達も歩いてきた。

因みに愛もベースを大事そうに背負っている。俺が昨日帰りに渡したからなんだけど、その日はなんか愛の様子おかしかったのはちよつと気になったな。妙にソワソワというかなんとか。落ち着きがなかった印象だった。

梓も大きな袋を抱えている。きっと昨日の夜一生懸命詰め込んだんだろな。悩みながら。

なんでもない日常会話を繰り返して、部室までのリノリウムの床を四人でゆっくり歩いていく。ギターケースを背中に背負いこんでい

るからか、心無しか周りの好奇の視線が俺達に向いているみたいだった。まあ大して気にも止めず部室に着いた。

部 室には秋乃さんの姿はなく、どうやら俺らが先だったみたいだ。

それぞれが一旦思い思いの場所にギターや機材、画材などを置いた。

「じゃあ、とりあえず座ってミーティングってことにしますか」

梓がそう声を掛ければ片付けを一旦止めてみんな集まり、先日とはまた違う場所に展開されていた二つの机で一つのテーブルとしていた机に寄っ掛かり、椅子に腰掛ける。

「ねえねえあずあず、これからどうしようかつ？」

愛が落ち着きなく椅子をガタンガタンと傾けながら梓を見つめている。確かに、まだ何をするとか決めてなかったな。愛に倣って梓に視線を送る。

「そうですね、ここは部長として私が指揮をとらないですよね」

そう呟けばどこかの会社のお偉いさんが重大なことを話すような雰囲気でテーブルに肘を着いた。

「片付けをしましょう」

ほぼ同時。梓とここには居ない秋乃さんを除く三人が活動停止し、頭から机にダイブした。あーあ、テーブルばらばら。ってか…痛い。普通に痛い。

「あずあず、それさっきまで私達やってたよ？」

「あううー…ですよー」

力無くテーブルの上に突っ伏す。そして少し涙ぐんだ瞳でこちらを見つめている。そんな目でみるな、俺だってなんにも考えてないんだぞ。

仕方なく何か適当でもいいから提案でもするかと助け舟をだそうとした時、扉が開く音がした。

「遅れてごめんねー。生徒会の仕事してました」

クリーム色のカーディガンをセーラー服の上に羽織った美しい秋乃さん登場。今日は前髪を二つのヘアピンで止めてて、いつもと少しだけ雰囲気が変わっている。ああすごく可愛い。

秋乃さんは申し訳なさに頭を下げつつ、壁際に置いてあるギターケースやベースをみて、「おおっ」と声を出して目を輝かせていた。

「かっこいいなあ：楽器があるだけで、うん。部室っぽい雰囲気になるもんだね」

そう呟けば秋乃さんは空いていた椅子に腰を降ろした。

「で、私ね。部室入ってからずっと気になって聞こうと思った事があるんだけど」

何だろう。首を僅かに傾げつつ秋乃さんに視線を送る。

「コレ、は一体何：かな？」

秋乃さんは困ったように笑いながら机に突っ伏して動かなくなつて部室の置物となった梓の頭を撫でてる。

「すまないが雛墨は今、頭がショート中なんだ。これからやる事を考え過ぎて動かなくなつたみたいだ」

な、古音。とこちらに視線を送ってくる蓮時。なんだよ、その件に関しては俺のせいじゃないだろう。

そんな蓮時の視線に軽く憤慨していたのだけれど、少し心配になつて梓に声をかけるべきか悩んで「大丈夫か？」と声をかけたら「うん：。私は大丈夫だよえへへ」と力無く微笑んでいた。いやいや、気にしすぎ。そんなになるまで考えなくてもよかったのに。

「じゃあさ、梓ちゃんも画材持ってきてるみたいだしさ。旗とかに色音ってでっかく書いてみない？みんなでさ。この部屋に飾ろうよ」秋乃さんが提案したものすごく魅力的なその内容に、素直に感嘆した。

そして梓のほうをちらっとみれば、爛々と目を輝かせ息を吹き返していた。あ、おかえり梓。

「わ、私、画材ある程度あります。もってきてます。立派な旗、皆

で作りました」

早速つと言い残せば梓は今まで地道に持ってきていた部屋の片隅にある画材置き場に行く。活き活きしてるなあ。

「とりあえず一日じゃ出来ませんよね。今日は意見を出し合ってま  
ずイメージを固めましょうか」

テーブルにルーズリーフを広げると全員様々なデザインを考案し、  
この日の内にイメージは固まった。まあ途中で落書き大会になった  
のは最早恒例と言っても良さそうだな。

後は制作に入るだけだ。細かい所の指示は梓がやってくれるみた  
いだし、凄く楽しみな。好きなバンドのライブDVDを見てても、  
バンドの後ろにある旗に憧れを抱いていたから、嬉しい。

それから完成まで要した時間は五日間。

かなり大きい旗を作成したので、描くのに苦労した。梓が提示し  
た手順を守った結果、五日間と早めの完成となったのだ。

中心には墨で色音と大きく、そして渋く描かれている。これに使  
用した大きな筆も自分達で作成した。勿論テレビなどで使うあんな  
立派な物ではない。即席らしく決して格好の良いフォルムではない  
けれど、しっかり墨を吸って力強く描けた。皆で作った初めてのも  
のだ。

その字の周りには様々な色を使って幾何学的な模様や綺麗な曲線  
で植物をイメージしたデザインが施されている。色の使い方が絶妙  
で、型にはまらないような梓のセンスに驚いた。なんとなくわかっ  
てはいたんだけど、やっぱり梓はすごかった。身をもって実感し  
た。

ハッキリ言っただけでかなり御洒落に仕上がっている。とても深く、壮  
大さが伝わる。自分も携わったから褒めちぎるのは気恥ずかしいけ  
れど、これは良い。大満足。

これは愛の提案だったんだけど、旗の右下にメンバー全員の手  
形がランダムに雑に在る。これも皆で考えて、それぞれ皆のイメー

ジ色を様々な塗料の色を綺麗に調合して作り、珍しい色を使って手形を付けた。なんか嬉しくなった。自分達の作品だよって、サインをしたみたいな感覚に少しくすぐったくなった。

俺らのバンドの練習場所に予定していた後ろの壁にでかでかと掲げられた色音の旗は一気に部屋の雰囲気をとていいものに変えてくれて、この旗をバックに演奏するのを想像しただけで自然と笑みが零れてしまった。

「完成したねっ！」

そう呟く梓の顔には塗料が付いてる。拭ってあげると梓は恥ずかしそうに笑い、掲げられた色音の旗を眺めれば本当に嬉しそうに微笑んだ。

もう散ってしまったはずの桜の花びらが舞った気がした。そして梓が描いたその模様を見ていると心がざわついた。最初は気のせいだと思ったんだけどどうも気のせいではないみたいだ…。

耳というよりか脳に直接、微かに流れる優しい音楽に戸惑ったけれど、今は頭に流れるその音楽を楽しみながら完成した作品を仲間と一緒に喜びに浸ろうと思う。

## ＊2－3色 群青リコレクション

例えば。

朝目が覚めたら全く別の場所にいた、とか。いつもと同じように部屋の扉を開けた先は違う風景が広がる場所だった、とか。

一度目を閉じ、次に目を開けたら地球の裏側に居た、とか。

そういう時の気持ちやリアクションはそういった体験をしないとわかりかねるものだろうけれど。

というか、完全にこの例え話はオカルトだし、そういうトンチキな体験をした人なんていないと思うけれど。

でも俺は今。擬似的でもそんな経験をする事となっている。大袈裟かなと思っただけど未だに信じられない気持ちだ。

先日の活動ではメンバーで作った色音の旗を部室の一角に飾った。それからまた何日か使って蓮時のドラムセットを運び出して設置し、その近くにスタンドを持ってきてギターとベースを立てている。俺と愛が使うアンプは俺のアパートにあった30Wのアンプと、もう一回り小さいアンプを持ってきていた。

なのに。今日、放課後の部室には有名ブランドのアンプヘッドとキャビネットが三台ずつ。その近くには新品のキーボードが設置されている。その横に秋乃さんは居た。エレキヴァイオリンを手に携えて。

その姿は凜とした花の如く、されど儂げに微笑んでいる。今からコンサートが始まるのではと思わず感じてしまう雰囲気と静けさに、声を出すのを忘れていた。その姿に見蕩れてしまっていた。

「あ：秋、乃さん？」

動揺しすぎたのか、声が裏がえってしまった。気が付けば同じように後ろで三人も固まっていた。



出来る限り思念を幾度も反芻した。なぜ、こうなったのかと。

ああ。思えば一昨日…

…

…

…

――二日前の放課後――

「あ、蓮時。携帯なってるよ」

今日一日のつまらなくて怠い授業が終わり、放課後俺の机で少しだべっていた時。ふと鳴った携帯の着信音は自分が設定して聞き慣れたメロディーのそれとは違った。

蓮時は胸ポケットから携帯を取り出しディスプレイを確認すると微笑し、電話を受けた。

「もしもし。…うん。うん。あ、もう着いたんだ？…うん。わかった、今行く。ありがとうな」

携帯を閉じると蓮時はスツと立ち上がり、教室の窓から外を眺めている。窓からの景色は綺麗な緑や和かな風景が広がっている。蓮時は何を眺めていたのかね。

「古音、ちょっと手伝ってくれるか？俺のドラムが学校までやってきたみたいだ」

「なんですと？蓮時のドラムがやってきたってば、えーと…ん？」

「姉さんが今日仕事休みでさ、頼んだら放課後校門の辺りまで持ってきてくれるって」

それで今着いたらしいと呟けば教室から出て行ってしまったのでついて行くことに。

「優しい姉さんだな。正直どうやって運ぶか考えてたけれど思い付かなかったから助かったわ」

蓮時の後を追ひ、隣を歩く。ドラムは重いからちよつと苦勞しそ

うだなと思っていた矢先の出来事に感嘆する。蓮時のお姉さん、ありがとう本当に助かった。

「蓮時の姉さんってどんな人？」

「んー…なんだろう。まあ元気だな。テンション的なあれは高いほうだと思う」

蓮時も整った顔立ちをしてるし、美人かもしれない。眼福に肖ろうと、俄然脚が軽くなる。早く行こうと蓮時を急かしつつ玄関へと向かった。

上履きから外靴へと取り替え、校門へ向かうとそこにはパールホワイトの乗用車が横付けされていた。

「おーい蓮時、遅いよおー」

車に乗り掛かりながら左手を挙げた女性がお姉さんだろう。

初めて見た蓮時のお姉さんは整った顔立ちをしている。UKロックスプリントのTシャツと、程良いダメージのジーンズが本当に格好良く、シンプルなファッションにも細かなお洒落感があり、とても綺麗なお姉さんだった。

何となく悔しくなったから蓮時の背中をドラムスティックで突っついてやった位だ。

「あれ、蓮時。もしかしなくても彼が古音君なのかな？」

「そうだよ。色音って部活を作った、同じクラスの友人だ」

犬みたいだなあとほんわか思っているといつの間にか俺の顔をお姉さんが覗き込んでいた。

「初めまして、蓮時の姉の琴美だよ。櫛枝琴美。宜しくなー少年っ」  
勢い良く俺の肩をばしと叩き、豪快に笑いながら宜しくと言っている。うん、本当だ明るいしすごく元気だな。

「じゃあ姉さん、あとは一旦降ろすからもう大丈夫だよ。ありがとう」

「そーかあい？なんなら姉ちゃんが中まで運んじゃうよーっ？」  
にっこにこ顔でそう提案するも蓮時から丁重に断られてシヨボー

ンの琴美さん。：姉？実は妹？なんにしろ可愛いなあ琴美さん。

「じゃあ私は帰るねー：ではまたな諸君」

小型犬みたいな琴美さんはドラムセットを校門の近くにおろし、帰ってしまった。

初見だったけどとても雰囲気柔らかく、そのなんとも言えない優しい空気に癒された。また機会があれば話してみたいな、と蓮時とドラムセットを部室へと運び出しながら俺は、知らない内に微笑んで、思っていた。

「古音、そのスネアはそこに置いてくれるか？もうテープでマーキングしてるから、それに合わせて置いてくれ」

俺らはあれから、携帯を使ってみんなに連絡をとった。少し校門で待っていると全員来てくれたので、部室まで余り往復しなくて済んだ。

距離が距離だったのでちよいちよい休みながら、ドラムセットは無事部室へと運び出せたのだった。

今部室では息切れを整え終わったメンバーで、機材と楽器を運搬及びセッティングしている。蓮時のドラムセットを玄関から部室、部室からセッティングと運び出すのかなり労力を消費した。

運んでいる最中日頃の運動不足もあって節々がギシギシと悲鳴をあげ、肉体がもう酷使するなと訴えかけてくる。いやー：もうちょっと頑張れ。

「つてか蓮時、このスネア良く買ったな。これいつだか楽器屋でみたわ、高いよな」

「まあな、ずっと欲しくて金貯めてたからな。駅前フレンドールって楽器屋あるだろ？そこで買ってから、大事にしてる」

蓮時が持ってきたのはかなり良いスネアだった。俺も雑誌とか見てて名前知ってたし。実際に叩いて音を聴かせてもらったけれどやっぱり良い音だった。心地良く体を突き抜ける打音は強く惹きつける魅力的な音だった。

因みにそのフレンドール楽器屋にはお世話になってる近所の気のいい兄さんも働いてて、その兄さんがセミアコのギターを譲ってくれたのだった。今も部屋で大事に保管している。

蓮時の指示通りにスネアを設置し、大体運び終わったので細かなセッティングは任せた。

ちらりと見るとドラムセットを運び出す最中に現れた梓と秋乃さんが美術スペースで配列している。梓も着々と画材揃って来ているみたいだった。

梓の美術スペースは、床に汚れてもいいように布が敷いてあって、製図板のような大きな絵描き台もある。棚には綺麗に画材が並べられ、美術って感じのスペースになっていた。

「雨姫君雨姫君、どうですか？いい感じだと思いませんかっ？」

そう嬉しそうに振り返る梓はキラキラと輝いて見えた。自分の好きなことをやる準備が着々と整ってきている事や、前に会話していた時にちらっと呟いていた事なのだけけど、仲間と同じ時間を共有できるのがすごく嬉しい、とそう言っていた。

「ああ、結構持ってるんだな画材。なんか知らない道具とかがいっぱいでちよつと見てるだけでテンション上がるよ。今度部室の片付けが落ち着いたら色々教えてな」

勿論だよつと意気込み、任せなさいと言いながら梓は片付け作業に戻る。秋乃さんはそんな梓の様子を静かに微笑みながら見ていた。ふと視線をこちらへ向ければ首を傾げて微笑んでいる。可愛い。愛は俺が持ってきたエレキベースを大事そうに見つめていた。なんとなく自分の使っていた楽器を大切にされるとくすぐったくなる。

「ねえ雨姫。このベース本当に借りてていいの？」

満開の桜の花弁のような微笑みをこちらに向けてきた。そんなに喜ばれるなら本望だ。

「勿論無期限で貸したげるよ。愛確か新しいベース今度買うんだよね？それまででも、もし使いたいなら卒業まででも、大丈夫だから」

「えっ？それはなんだか流石に悪いなあ…」

「ほう。とうとう愛も遠慮を覚えたか」

「ちよっ、ば…馬鹿にしないでよ。雨姫めー…でもでも、ありがとう。じゃあ借りる…ね？」

チラッと上目使いで見上げる愛。思わずそのベースあげるよなんて言いそうになった。

幼馴染だけど…うん。女の子は可愛くなるんだなあ。昔は男兄弟のように遊んでいてもゲフン！！これ以上は愛が俺の思考を読んでダブルリアットをかましかねないので自重する。

「ん。自由に使っちゃって構わないから」

「えへへ、ありがとう。でも、あたしが新しいベース買うときはちゃんと付き合ってね？忘れないでよ？約束したんだからね？」

絶対だからねと付け足して、お年頃な高校生ならば一瞬で恋に落ちてしまうような微笑みを浮かべると、大事そうにベースを抱きしめながらドラムの隣辺りで細かな調整や弦高の確認、オクターブチューニングを始めた。なんだか宝物を扱うように見えた。

梓や愛、蓮時が一生懸命準備とか調整をしているのを眺めていて、ふと自分の調整とか片付けがまったく終わっていないことに気付く。いかんいかん。

早速持っていたエレキギターのレスポールをケースから取り出す。とりあえず傷が付いていないかざっとみて、チューニング用エフェクターと、エフェクターとギターを繋げる為のシールドを袋から取り出して接続端子に差し込む。ついでにオクターブチューニングもと作業を進めているといつの間にか隣にちよこんとしゃがむ秋乃さんがいた。気付かなかった分、気付いた時ちよっと顔が近くてドキドキした。

「わあ…ギター、だよね。うん、かっこいいなあ」

チューニングもあらかた終わり、持ってきたエフェクターを順番にシールドで繋げながら秋乃さんの少し熱い視線を感じていた。あんまりこうゆうの見た事ないのかもしれないな。

「ねえねえ、それはなにをしているの？」

べ、別に興味あるわけじゃないんだけどねーっ、と見事に可愛い仕草にセッティングの手がぴたりと止まってしまった。意外と素直じゃないんだなあ、可愛い。

「えーっですすね、これエフェクターっていつて、このギターの音に効果を付けられる機械をうまく配列してギターに繋げている途中なんです。例えばこのディストーション、オーバードライブってエフェクターは簡単に説明すると音を歪ませたりする効果があります。ロックではかなり必須なエフェクターですね。他にもディレイやコーラスなど空間系と呼ばれるエフェクターもあるんですよ。あとワウペダルと。これがそうなんですけど、後で繋いでみますのでその時聴いてみてくださいいね」

再び手を動かし、エフェクター用のシールドを接続しながらそう言うとき秋乃さんは嬉しそうに頷いていた。

「ほ、本格的なんだね古音君。で、えーっとき、私はどうしたらいいのかな？」

困ったように小首を傾げる秋乃さんは興味深そうにエフェクターを眺めている。秋乃さんは確か自己紹介でピアノとヴァイオリンを昔からやっていたと言っていたので、バンドの音圧とアレンジの裾野が広がるとすごく嬉しくて喜んだのは記憶に新しい。

「秋乃さんは、ピアノとヴァイオリン弾ける、んでしたよね？」

「うん、一応小さな頃から習ってたわね。私の家って神社の管理とかしてるし結構和風な家なんだけど私が昔どうしてもと言って習わせてもらったの」

なに、神社の管理？神社：神社好きの俺にとって魅力的な言葉が飛んできた。とても気になるし、御茶でも用意して盛大に話を広げたいんだけど、次の機会までおあずけ。近いうち必ず秋乃さんと神社の話をしよう。

「神社って：じゃなくて、それだけ卓越してそうならキーボードとかヴァイオリンで、バンドしたいですよ。キーボードとかエレキ

ヴァイオリン持ってたりします?」

そう聞くと秋乃さんは思案顔になり、口元に可憐な指をあてている。色っぽい。

「キーボードは何となく解るから用意出来そうなんだけれど、そのエレキ?エレキヴァイオリンって、何なのかな?」

エレキヴァイオリンを取り入れているバンドは洋楽にも邦楽にも現存している。かなり独特な音楽性になって、ギターソロとはまた全く違う格好良さと繊細さが生まれる。

「バンドとしてオーケストラ等で使うアコースティックヴァイオリンを使うとなると、どうしても周りの楽器に負けてしまいがちなんです。いや勿論アコースティック使っているバンドもありますけれど、割り切ってエレキヴァイオリンにしたほうが俺は好みですね」

秋乃さんは必死に俺の言葉を拾っては携帯でメモしているようだが、でもなんといっても機材は高いので無理はしないで欲しいと付け加えた。

「成程…。古音君詳しいね、ビックリしたよ。了解しました」

詳しいというか音楽好きだったから知識も自然と入ってくるのだ。沢山聴いたり見たり演ったり読んだり。

秋乃さんは、「あ、それとね」と続けて質問があるようだった。

「その、アンプ?っていう機材は、ないもしかしてエレキヴァイオリンは鳴らないの?」

「そうですね。このギターもそうなんですけれど、アンプに繋がないと基本的に音は出ないです。因みに持ってきたのはそのドラムの横にあるアンプです。30Wでちょっと物足りないけれど全然問題なく演奏できると思いますよ」

俺もいつか大きい100Wくらいのヘッドアンプとキャビネット欲しいんですけれどね、と苦笑いを浮かべた。

「成程：勉強になるなあ。じゃあアンプも必要なのね?大きいとやっぱいいんだなあ」

途中で小声になり、また思案しながら秋乃さんは「ありがとう古

音君」と微笑んで机で作ったテーブルに戻っていき、必死に携帯を操作していた。ああ、秋乃さんも色音の事を真剣に考えて、そして真剣に楽しんでるんだなあと横顔を眺めて嬉しい気持ちになった。それから各自細かなセッティングをして、その後軽く音出したりお茶飲んだりしてその日の活動に満足してみんな帰路に着いたのだった。

……  
……  
……

回想終わり。

そして改めて目の前の光景に視線を送る。

そこにはやはり間違いなくキーボードがあり、エレキヴァイオリンを持つている秋乃さんがこちらを見ている。30Wのアンプは壁際に綺麗に収納され、そのアンプがあった所には100Wのキャビネットとヘッドアンプがある。何度目を擦っても間違いなく、ある。「あれ？みんな、何で入ってこないの？」

入れなかった。と言うか入るのを忘れていた。信じられない光景に飛びかける意識をなんとか取り留め、秋乃さんの元へ歩いていく。「あの：秋乃さん、この機材は一体どうしたんです？」

愛と梓は既に興奮気味にアンプの方へ「す、すすんごーい」とバタバタ走っていく。いや、うん。そりゃ凄い。俺だって本来ならばそちら側だ。大興奮して触りにいくだろう。ただそれより驚愕のほうがまだ上回っていて無邪気に喜んでいいのか戸惑うのだ。

「ほら、二日前だったかな？古音君と話したじゃない？その時に必要かなー、揃えたほうがいいなあって」

ふわっと嬉しそうにそう言うと、徐々に不安げな表情に変わっていく。しまった、俺の顔は今、戸惑い顔だ。女の子を不安げな顔させちゃ、なんか駄目だ。

「わ、私余計な事、しちゃったかな？もしかして、違うもの買っち



やった…?」

「いや、バッチリです。バッチリ過ぎてまだ実感が湧かないんですが、あの…どうやってこんなに揃えたんですか?」

「えっとね、キーボードは頂きもので、エレキヴァイオリンは家の者に話したら用意してくれたんです。アンプも、お父様が楽器屋に深い知り合いがいて、用意しちゃってくれたんです」

ええええお父様すげえ。これだけの機材をなんなく揃えるなんて一体何者なんだ? ってか家の者って。ヤバイ、これ秋乃さんの家の事ちよっとってか、かなり気になる。

何にせよ無理して揃えた訳じゃない事を知って安息。それにしてもすごいな。こんなのうちよとしたライヴハウスじゃないか。それにエレキヴァイオリンは現物初めて見た。まじまじ見ていると秋乃さんは若干恥ずかしそうに頬を赤らめていた。可愛い。

「使い心地はどうですか? アコースティックヴァイオリン慣れてると、エレキヴァイオリンにしたときに弦とか形とか諸々違和感があるといいますし」

「確かにまだちよっと慣れないかなあ。でもなんか新しい楽器使えて嬉しいし沢山弾いて馴染ませるよ」

瞬間。ぶわっつと綺麗で暖かな桃色の風が勢いよく身体を吹き抜ける感覚がした。

子供が新しい玩具を貰ったような。欲しかった物をプレゼントされた少女のような可憐で純粋な微笑みに、暫く見入ってしまった。いた。

その後、エレキヴァイオリン、ベース、ギターの各自楽器を秋乃さんのアンプに繋げ、試し弾きして楽し過ぎて時間を忘れ、下校時間をとうに過ぎていた事はもうアンプを目の前にした時にまあ分かった事だったのかもしれない。

## \*2-4色      胡桃色コンフィレンス

先日、というのは突然で驚愕の出来事となったヘッドランプとキャビネットを秋乃さんが持ってきた日、そのあまりに豪華なランプを使用して演れる事に夢中になりすぎて時間の流れに気付かず夜九時を時計の短針が過ぎ去った頃。

見回りにきた先生に叱られて、皆で急いで片付けて玄関までヒゲの赤いおっさんよろしく猛ダッシュして走っていると、沸々と笑いが込み上げてきた。青春っぽいなあとはながら、周りの仲間と共に激しい高揚感に満ちていた。

すっかり暗くなった校内には部活に励んでいる生徒達の声はもう既になくて、その時にああ、結構遅くなっちゃったんだなと実感した。そりゃ流石に先生も怒るわな。

静かな夜の学校独特の怖さなどは全く皆無で、むしろ俺達は互いに驚かせ合ったりして楽しい気持ちのまま、青春色に染まったりノリウムの床を駆け抜けた。廊下の窓から流れていく街の灯りが妙に暖かった。

「雨姫君、早くしないと追いつかれちゃうっ」

梓の心配する声が聞こえた。言われなくとも必死に走っているのだけれど距離は開く一方で全然追いつく気配がない。如何せん運動不足が祟って息切れが激しく、うまく空気を肺に送り込む事が出来ずにいた。

「ちょ：まっ：皆なんでこんな時だけこんなに早いんだよ！」

うまく前に足がでてくれなくて纏れてしまう。背負ってあるレスポールが足の前に出す度に激しく背中を殴打する。ってか重いんだよレスポール自重しろ。

「雨姫ー早く走らないと置いてっちゃうぞー」

あはははと透き通った声で笑いながら俺に声をかけてきた。つかかなんでベースを背負ってても愛は、あんなに早く走ることが出

来るんだろう。身体能力の高い奴なんだなあと関心しながらも、このなんとも刺激的な状況は正直めっちゃめっちゃ楽しくてしかたなかった。

この後怒れる先生を振り切り、無事に学校から脱出した俺達は軽く雑談した後、解散した。其々が帰路についた。

夜遅くまで学校にいたとか、そうゆう皆でちょっとだけ悪い事をしてる感がまた、青春っぱさや楽しさを増長させてたんだと思う。非常に楽しくて刺激的な時間だった。

この日寝る前に今日起こった楽しい出来事をつらつらと思い出してみた。

あまりの事に思わず含み笑いをしてしまった。そうして数分余韻に浸っている数分後、布団の暖かみに意識を放棄すると、身体は思いのほか疲れていたらしくあっさり眠りに落ちてしまったのだった。

そんな俺の人生を形成する為に必要な一つの大切な思い出となった日からまた数日後。

気付けば春はあっさりと通り過ぎ、あんなに綺麗だった桜もひらと既に散ってしまっていた。満開に咲いた桜の木があれだけの量なのだから、散っていく光景もそれはもう凄まじいものだった。目に入る色彩情報の殆どが桜色。ひらりひらりと舞い散る桜は、散りゆく最後まで綺麗だった。この世の光景とは思えない絶景に、寂しいけれどまた来年逢おうなあなんて、桜に心の中で話しかけたりした。

うん、季節は順調に進んで、すっかり初夏だ。

そんな初夏のとある放課後、掃除当番をこなしたのと担任の中野先生に雑用を頼まれたので俺は部活に行くのが少し遅れてしまった。用事をちゃっちゃと済ませて、足早に部室へと歩を進める。廊下に流れる涼しくて爽やかな空気は、仄かに春の名残を感じさせ、もうすぐ青春の夏なんだなあなんて考えているとあっという間に部室に着いてしまっていた。

部室のドアを開けると窓から臨める新緑の樹は初夏独特の優しい風を受け、そよそよと揺れている。そんな風景が重なって、部室がいつもよりも鮮やかに感じた。

部室にはやはり既に全員揃っていて、机を合わせただけのテーブルに集まって座っていた。それぞれの目の前にはメモが書かれた紙があり、テーブルの真ん中にはルーズリーフ一枚置いてある。

そう、今日は皆がそれぞれ演りたい曲を何曲か選んできて、それをルーズリーフにまとめる発表大会を開催するのだ。

「雨姫遅いよー、もう始めちゃうとこだったよ？」

ぷんぷんっと擬音が聞こえる気がする程に頬を膨らまして、愛は安堵の表情でわざとらしく腕を組んでいた。向日葵の種を含んだハムスターみたいだな。

愛に倣って秋乃さんも梓も蓮時も此方を見ればどこか安堵した表情を浮かべていた。

「遅れてごめん、じゃあ早速リストアップ始めちゃおうか」

端っこに鞆を置きに行ってパタパタと簡易テーブルに小走りして向かう。ちょうど空いていた梓と蓮時の間の席に座る。

色音が出来てからずっと何の曲を演ろうかどんなバンドをコピーしようかとひたすら悩み続け、ある程度曲を絞ることも辛かった。バンドを組んで、大好きな音楽が出来ると思うと気持ちが高揚して、どうしても欲張ってしまうのだ。

その悩みと同じくらい、いずれはオリジナルをやるってのもあり想像して考えて考え尽くしてきた。要するにこれからの事が楽しみすぎるってことなんだよな。

「おお、みんなちゃんと書いてきたんだ？」

それぞれの前に置かれた紙を見れば曲名がリストアップされている。

「雨姫君もちゃんと書いてきた？ ってもしかして考えすぎて昨日の夜寝れなかったりしたりして」

変な所で鋭い梓にずばり凶星を突かれ、少し狼狽える。それをみて「やっぱりねー」と微笑みかける梓は可愛らしいんだけどなんか恥ずかしくなって目線を逸らした。

梓の言った通り、昨日の夜は家事の諸々を済ました後ひたすら悩み倒していた。オーディオの前に胡坐をかき、大量のCDを周りに壁を思わせる程に積み上げて、「決められない…」と漏らした声は安アパートの部屋に虚しく響いていたのだった。

梓の指摘に昨夜の事を反芻している内に愛が発表大会の流れの舵を取り始めた。

「じゃああたしから、発表しちやおっかなー」

そう楽しそうに言い出した愛が右手を挙げた。

そんな愛を見て今気付いたんだけれど、愛は俺が中学の時にあげた黒のゴムでできている細いブレスレットを未だにしていた。まだ持っていたのか、なんてあげた俺がすっかり忘れていた。えーつと確か中学一年の晩秋だったかな、姫神山の麓の祭りに愛と一緒に行った時に、俺が小物の出店で二つ買っていて、その頃食べ物屋台に夢中になってた愛はお金が無くなってしまい、「それ欲しい、雨姫、それあたしも欲しいよお」と涙目でだだこねてた際に一つ腕から外してあげたんだっけ。そんな事を思い出して懐かしい気持ちになった。

「ん、ちょっと。なにそんな見つめてんの雨姫。発表しづらいよ」

恥ずかしいよ…、と声を窄めると何故か頬を赤らめて手に持っていた紙を忙しくいじっていた。何となく愛の最近見せ始めたそうゆういちいち可愛らしい仕草に気持ちこぼした。

「じゃ、じゃあ気を取り直して発表するねっ。私からは厳選して一曲ね。dec\*27さんの相愛性理論を皆で是非演奏したいです」いきなり名曲がきた。俺自身相愛性理論がもの凄く好きで、よくこの曲を聴きながらギターで合わせてたな。今日選ぼうと思ってリストアップして未だに悩んでた曲。演奏すると思ったら秋乃さんのエレキヴァイオリンがいいパンチになって壮大な演奏になる。皆の奏

でる綺麗な音色でギター弾く事を忘れちゃったりしてなあと思った  
りしていた。よくやった愛。

「おお、愛ちゃんの選曲間違いないねえっ、相愛性理論かあ」

梓が興奮した様子でテーブルに乗り出している。その曲ね、動画  
サイトに投稿されたときから私はもう虜になっちゃってね、リリ  
ースされたCD盤はまたアレンジされてて実は結構違ってるんだよ  
ね、と珍しく饒舌になっている。音楽の話になるとこうなるんだろ  
うか。それでねそれでねと更に続ける話にはもう秋乃さんしか聞い  
ていないのすら気付いていない位夢中になっていた。

「俺はもう大賛成だな。蓮時はどう？」

梓の話を途中まで聞いていたけれど途中から口元に手をやって思  
案顔の蓮時に話し掛ける。

「ああ、皆いいならいいんじゃないか？ちよつとどんな曲だったか  
曖昧だから帰ったら聴いてみるわ」

蓮時はうつすら覚えている位だった。今日発表する楽曲は皆が皆  
知ってる訳ではないのは判りきっていた事だったからとりあえず中  
断せずに、真ん中のルーズリーフに愛が相愛性理論と可愛い字で書  
き込んで、このまま発表会を続けることにした。

「じゃあ次俺だな。BIGMAMAってバンドから、CPXを提案  
する。俺も水無月先輩のエレキヴァイオリンがあるのはかなりでか  
いと思うから、ヴァイオリン使ってるバンドから選曲してオリジナ  
ル演るときのバンドサウンドにヴァイオリン合わせる感覚養えると  
思ってたさ」

BIGMAMAっていうバンドは、蓮時の言う通りエレキヴァイ  
オリンを採用している邦楽のバンドで、初期メンバーでは男性がエ  
レキヴァイオリンを担当していたが現在はメンバーチェンジの後に、  
女性が演奏している。cpXも、演奏者が変わって再録されていて、  
やはり微妙に変わっていた。初期は激しく、今も激しいのだけれど、  
どこことなく穏やかで優しい。厳密にいうと実は半音違っている。個  
人的にも最初のミニアルバムに収録されていたCPXという曲の完

成度に関しては脱帽していた。再生して最初の二秒でエレキヴァイオリンのソロ旋律に脳を叩かれ、余りの格好良さにその三秒目で既に惹き込まれてしまう。そのヴァイオリンに続いてギター、ベース、ドラムが同時に激しく奏でる頃にはもう言葉を失い、虜になるのに十秒もいらなかった。

その旨を蓮時に変わって俺が皆に伝えた所、この曲を知っていたのは俺と蓮時と梓のみだったので、後で秋乃さんと愛に聴かせてあげることにした。そして蓮時はルーズリーフにc p xと追加した。蓮時の字はなんか繊細な字だった。

「じゃあ私。次発表しちゃおうかな」

秋乃さんが控えめに手を上げるとメモを片手に立ち上がった。今まで発表した二曲はどちらも秋乃さんのエレキヴァイオリンを活かす選曲だったけれど、秋乃さんはどうなのだろう。俺は少し緊張して立っている秋乃さんに視線を送った。

「私は、その：あんまりバンドとか詳しくなくって。今日まで凄く悩んだんですけど、テレビというか、音楽専用チャンネルを家で見ていたときにACIDMANってバンドの曲がすごく綺麗で激しくって。出来るのなら是非、赤橙を演りたいんです」

正直驚いた。秋乃さんがACIDMANを知っているなんて。メンバーを見ると皆同じ表情をしていたので皆ACIDMANをきくと知っていて、同じ気持ちなのだろう。なんとなくクラシックと上品な音楽を聴いているイメージだったから意外だった。

ACIDMANは一曲の中に静と動、生命、宇宙を詰め込んで壮大な音楽性と歌詞性を孕んでいるバンドだ。聴き終わった後は映画を一本見終わったあの独特な感じになる。

リリースされたCDはほぼ持っているくらい俺も好きだし、その中で赤橙選曲とゆう選曲ががまた渋くて、もう大賛成だった。

「水無月先輩、ACIDMAN好きなんですね。本当いいですよねえ、あの独特の雰囲気。あたしも大好きなんです」

嬉しそうに頬を緩めます愛が秋乃さんに視線を送れば「賛成、大賛

成っ」とテーブルに乗り出している。

今思えば中学の時だったかな、俺がACIDMANの曲を初めて聴いたのも赤橙だった。偶然流れたPVに見入った記憶がある。優しく切なさを感じさせるコードを使った進行で、哀愁感が漂う良い雰囲気曲だった。そのあまりの完成度にPVを見た後すぐにレコード屋に走って買いに行ったなあ。あれは雨の降りしきり、道路が雨に濡れて熱された雨が噎せ返る匂いを放つ夕方頃だったか。偶然レコード屋にて出くわした愛に聴かせたら愛も即効ハマっていた。ベースラインも相当に格好良いのでもしかしたらもう愛も弾けるのかもしれない。

「愛はもしかして赤橙もう弾けたりする？」

「当然ですよ。雨姫に聴かせてもらってから学校で部活前とかに密かに練習したもん。ウッドベースでだけけどね。今でも大好きだから運指は覚えてるよ」

どや顔して答える愛を見て、赤橙はすぐに合わせられそうだなあと思っていたと秋乃さんは真ん中のルーズリーフに書き込んでいく。大人っぽい、習字でも習っていたのかなと思うくらい綺麗な字だった。

「じゃあ次は私ね。うー、なんか緊張しますね」

梓が照れくさそうに隣で呟く。梓の隣に居るとなんでか頭を撫でたくなる衝動に駆られる。まあ撫でちゃうんだけれど。

「はうっ。うー、ありがとう雨姫君」

そのときふと、愛と視線がぶつかる。心なしか愛の表情が愁いているように見えた。あまり見ない表情で、少し心がざわついた。

「じゃあ、発表しちゃいます。私はFACTってバンドのa f a c t o f l i f eを是非とも推薦したく思います」

「うおっ、マジでか!？」

驚いてそう声を上げたのは蓮時。蓮時もFACTが好きでよく聴いてたんだっけな。

「あのドラム出来るかなー…いや凄くいい曲だし格好良いに決まっ



てるんだけど、古音は？あれ弾ける？」

戸惑いつつもやる気ありげな雰囲気であに問い掛けてくる。その時クンッと弱めだけれど背中のシャツを引っ張られた。振り返れば、梓が小動物よろしく心配そうな表情で此方に視線を送っていた。

「んー…出来るかなー。でも折角だし演りたいな」

F A C T。邦楽のバンドなのだが、日本人離れした演奏と歌唱力。そしてライブ力がものすごい圧倒力。

「でもその曲わからないけど、皆の考えて絞り出した一曲ならどんなに頑張っても私は演りたいな」

秋乃さんは俺と蓮時の会話を聞いた後、演りたいと言った。まだシャツを掴んだままの梓が嬉しそうに微笑んでいる。向日葵のような爽やかな風が吹き抜ける。そんな笑顔向けられたらどんなに指が痛くなっても演りたくなるだろう。一度聴けばわかるのだけれど、激しくもキャッチーなメロディーに身体を激しく動かし、頭を振らずにはいられなくなる。P V等で能面を被って演奏したりしていて、能面バンドとも呼ばれたりもしている。

「でもごめんなさい私、そのバンドわからないわ」

あまりロック系の音楽に縁がなかったらしい秋乃さんはそう呟くと申し訳なさそうに此方に視線を送った。全然問題ないから、だからそんな顔しないでほしいな。

「今日リストアップした曲はC Dに焼くんで心配いりませんよ。皆に配ります」

秋乃さんは安堵したのか「ありがとう、それはすごく助かるわ。優しいのね」と柔和な微笑みをくれた。秋乃さんに続いて皆がありがたうと言ってくれたのが妙にくすぐったかった。すごく嬉しかった。

「じゃあ最後は俺だな」

少し緊張しながらもメモを手にとって起立する。一斉に注目を浴びて少ししたじろいだ。

「雨姫は何の曲を提案するのっかなー」

愛、なんか変なプレッシャーをかけるのを止めてくれ。そんな期待に満ちた目をして見つめられると一瞬何を話そうとしたのか解らなくなりそうになった。

「ん、じゃあ発表するわ。結局一曲に絞りきれなかったんだけど、いいかな。ボカロから、えこまるさんのサーカスの夜と参月の雨、ハートは万華鏡の三曲。欲張ってごめんな、でもこれだけは絶対皆で演りたいんだ」

この曲達を聴く度に何故か泣きたくなる。梓、愛、秋乃さんには是非とも歌ってもらいたい。多分、泣いてしまう。

サーカスの夜と参月の雨、ハートは万華鏡は作曲がえこまるさん、作詞がはいのことんさんで構成されている。サーカスの夜は落ち着いた曲調で、それこそ夜、雨、愁いを想わせる雰囲気がとても心地良い。何回聴いたかわからないくらい、毎日のように再生してきた。参月の雨に関しても落ち着いた曲調なのだけれどどこか激しい。

少女視点の歌詞も独特な心情を歌い上げる歌詞とメロディは流石の一言。深く深く俺の心に染み込んで、そして掴んで離さないのは言わずもがな、だ。

ハートは万華鏡はメロディがすごく惹き付けられるし、この曲もはいのことんさんの絶妙な歌詞が上手く混ざり合って聴いてて体が動いてしまう。何度も何度もオーディオに向かって沢山弾いてきた。独りで、だ。

因みに今提案した三曲は既に弾くことができる。初めて聴いた瞬間弾きたくてしかたなかったあの日以来、しょっちゅう弾いていた。こんな日が来るのを小さなアパートの一室、オーディオの前で待ち焦がれながらギターを弾いていた。

「古音君三曲もなんだ、どれも知らないから早く聴いてみたいな」

「古音、本当に絞りきれなかったんだな」

「でもでもいい選曲じゃんね。間違いないなあ。早く演りたいなっ」

「雨姫君の欲張りっ。でも素敵な選曲。えこまるさんの音楽とはい

のことんさんの歌詞の世界観は私も大好き」

次々に俺に言葉が浴びせかかる。確かに皆みたく厳選しきれなかったけど受け入れてもらえたみたいでホッと安堵の息を小さく吐いた。

「えこまるさんの曲を選ぶ辺りがやっぱり雨姫君って感じだね。私も本当に好きだなあ、あの二人が作り出す全く別の世界、世界観」

同調して愛もうんうんと頷いている。ふと思ったんだけれど、今日リストアップした曲、梓は全部知ってたんだな。んーヤバイ、ますます梓のiPodの中身が気になるな。聴いてる音楽の範囲かなり広そう。そんな事を思いながら夢の詰まったルーズリーフを自分の前まで引き寄せて眺めた。

・相愛性理論

・CPX

・赤橙

・a fact of life

・サーカスの夜

・参月の雨

・ハートは万華鏡

そう可愛い字や俺の汚い字と其々の字で不揃いに彩られたルーズリーフからは、眺めているだけで演奏する俺達の姿が見えるような気がした。

ふと目の前のルーズリーフがぼやけた。何かなと思っていたら、ああ、なんだ。目に汗が少し溜まっているんだな。一回駄目で諦めて、それでも本当に切望した事がこうして実現していった事に歓喜せずにはいられなかった。

「みんな。本当にありがとう」

思わず感謝の言葉が出た。それとなく涙声がバレたかなと、はにかんでごまかしたけれど余裕でバレていたらしく、隣の梓が柔らかい微笑みを俺にくれた。

「いいんだよ雨姫君。私も今凄く楽しくて、もしかして夢なのかな？なんて、ほっぺたつねったりしてさ。笑っちゃうでしょ？だから、御礼を言うなら私のほうなんだよ？」

あの時、私の席が雨姫君の前で本当に良かった。と眼を瞑ってその言葉を紡ぐ梓はとても落ち着いていて、普段の梓とはちよつと違った雰囲気纏っていた。ふわふわと優しい感じはそのまんまで。

偶発的にもやりたい事は最初は違えど同じ事で意気投合して、ここまでできて活動している。そんな小さな奇跡にそつと感謝の祈りをした。

「よし楽曲揃ったね。うわああ早く演りたいなあ。ねえ雨姫、私早く演りたい」

忙しなく椅子から立ち上がると愛はアンプを置いてある隅っこに駆け寄り、「もう、我慢できないよ」っとベースケースからベースを取り出すと、セッティングを始めてしまった。

まあ実を言うと俺もかなりうずうずしていたので、やれやれと呟きながらも小走りでギターを出してチューニングを始めた。

あつという間に愛はアンプの出力を上げ、部屋は音に揺らされながらも重低音に包まれた。俺もその音に答えるように音量を上げていく。愛のアドリブに被せていく。

段々音が増えていく。打楽器、ドラムの空気を震わす音が愛と俺の旋律にうまく混ざりこみ、秋乃さんのエレキヴァイオリンとキーボードが更なる彩りを加えてどんどん音は集まっていく。

重なり合い、混ざり合い、彩りが増し、段々気持ち良くなってくる。マイクを持った梓がジャンプしたのを合図に全ての音が更に纏まり激しさを増した。

音が絡まりあい、振動する教室の中で、ああ。今日も遅くなるんだろうなと一秒考え、二秒後には奏でられる音に酔いしれ、また俺達は時間を見失ったのだった。



## ＊2－4色　胡桃色コンフィレンス（後書き）

今回、名前を引用した際許可を下さっているえこまる様、はいのこ  
とん様、decocom27様には感謝が止まりません。有り難うござ  
いました。

他にも様々バンドと曲を書いてしまいましたが、もしも関係者様、  
問題ありましたら連絡ください、至急手直いたします。

お気に入り曲をリストアップしてこっちまで楽しい気持ちになり  
ました。書いていて楽しくて何度もギターに手を伸ばして執筆を中  
断してしまいました。

機会がありましたら、色音のカバーするリストアップされた楽曲達  
を聴いてみて下さい。どれも素敵な曲で愛して止みません。

## \*2—5色 萌黄アルペジオ

定期的に訪れるささやかな幸せ、微睡みの朝。

カーテンの隙間から差し込む朝の日差しと共に、小鳥達の可愛いらしい会話が爽やかにアパートの庭に響く中、淹れたての珈琲のいい匂いがこの小さなアパートの部屋の中を緩やかに巡り、ふわりと包み込む。

現在時刻は九時。俺はコピーした曲目リストアップのルーズリーフの紙を眺めつつ、珈琲を口を含む。オーディオのリモコンを手繰り寄せて、再生ボタンを押すと、洒落た jazzhiphop の優しい旋律が気持ちよく流れ、部屋をまた違った風に彩ってくれる。

「休日の、天気の良い朝って清々しくって気持ち良いなー…」

ついそんな独り言を漏らしてしまう位には日曜日の朝を満喫していた。

珈琲を飲みながらふと一昨日の放課後の事を思い出す。皆で考えるに考えた演奏したい曲を発表しあって、コピーする曲を決めた。どの曲も本当に素敵で大好きな曲だった。

ルーズリーフに皆曲名を書き込んだ後、愛がもう我慢できなくってベースをいそいそとセッティングし始めたと思ったら速攻アンプに繋いで弾き始めちゃって。でもその時アンプから爆音を鳴らした時の愛の後ろ姿はなんだかライブハウスで、SEが流れてこれから演奏が始まるって心躍るあの瞬間に凄く似ていた。

部屋に心地良い重低音が空気を揺らしはじめた頃「仕方ないなあ愛は」なんて呟きながら俺もレスポールのギターにエフェクターとシールドを繋いで、チューニングし終わると愛の音量に合わせて音を出す。

愛の奏でるこのアドリブの音とリズムは本当にアドリブなのか？  
ってくらいセンスがよくて、そのベースの音を浴びて身体を揺らさ

ずにはいられなかった。いつまでも聴いていたい、と思った。

愛の音がある程度堪能してから、ゆっくりとレスポールの弦に触れて感触を確かめてからその進行にコードを合わせて簡単なリフを弾いてみる。顔を上げてちらりと愛の表情を見ると視線が交差し、合わさった。俺はバンドをやっているゾクゾクする瞬間の一つに、演者との視線でのやり取りっていうのがある。言葉を介さずに全てが伝わっているあの感じはもう最高に気持ちが良い。実際にその感覚に触れる事でしかあの魅力を伝えるのは難しい。

愛と交えた視線をギターに戻す。それと同時にミュート演奏でリフを刻むと愛は心底気持ち良さそうに微笑むとベースを弾いていた。音の波に身を任せるようにお互いが激しく体を揺らす。

ふと先程までミーティングしていた机を合わせただけの簡易テーブルの方を見る。あれ、誰も居ない……と思ったら蓮時はドラムの横に立ってスティックを使って腕のストレッチをしていた。

「飛ばしすぎ。いきなりはそのリフについていけそうにないっつの」

嬉しそうに、そう呟いていたように見えた。いや、言っていたと思う。口の動きでなんとなくだけれど。そんな事を思っていた刹那、突き抜けていく打楽器特有の衝撃が愛と俺が奏でるアドリブのリフに乗っかってきた。蓮時が放つドラムの音に意識がくらくたとなるほどに痺れてしまっていた。

実質蓮時とのセッションはこれが初めてで、最初のINの時点でもう気持ちが良いくて意識が飛びそうになった。スタイリッシュに刻むリズムにはぶれがあんまりなく、そのドラムの力強いうねりのある音は、愛と俺のアドリブの曲をまた一つ違った色合いに彩り、完成度や快感度も激しく上昇していく。時折目を瞑り、リズムを刻む蓮時はこの瞬間を切望していたような凄みのある姿で、瞼を開けて目が合った蓮時と俺は微笑んで頷いた。

続いて弾きながら秋乃さんと梓の姿を探す。秋乃さんも慣れない手付きでアンプを操作していて、音を出した時にその音量にびっく



りしていた。可愛い。

それこそ秋乃さんとセッションするのは初めてだった。何よりもこういったスタイルでの演奏に慣れてないのでは？と以前尋ねてみた時、勉強の為にバンドのDVDを貸して欲しいですと頼まれたのでよく貸していた。バンド全体の空気感など、楽しめる事は勿論だけれど学べる事が凄く多い。実際、こういうセッションの経験は殆ど皆無といってもいい秋乃さんも、慣れない手付き慣れない環境という状況ながらも楽しめているように見えた。それはもう表情を見れば一目瞭然だった。

そしてそれぞれの楽器の音が絶妙に重なり合った所で、俺の持ってきた30Wのアンプにマイクを繋げた梓が、いつの間にかみんなの真ん中に立っていた。

ちゃっかり俺の目の前にもマイクスタンドを準備してくれた梓は全員が奏でる音を体全体で感じ、受け止めるように腕を広げていた。その表情は恍惚としている。

蓮時が、ちょっとした合図を出したのをきっかけに皆の音が一斉に止み、俺のギターの音だけが響く。時が止まったかのようなこの空間にレスポールのディストーションの歪みが最高潮に気分を快感へと変えていく。

そして目配せをして全員が音を出したと同時に梓の声が部屋に響く。とても透き通った、それでいて芯が強い、綺麗な声だった。

体全体を使ってリズムの波に乗る。そんな梓もアドリブで適当な歌詞を楽しげに歌っていて、惚々する微笑みがふわり咲いている。

梓の歌う姿を眺めていると、チラチラとこちらに視線を送ってくる。まさかその適当な歌詞を歌えと？

どうしようか迷った挙げ句、歌詞はわからないから適当に梓の歌声にハモってみた。

五人の音が絶妙混ざり合って激しい絶頂感を感じた。爆音を浴びて合わさって、本当に気持ちが高揚した。

その刹那、ドラムの音が消える。続いてベース、エレキヴァイオ

リンと音が消えていく。どうしたんだ？と辺りを見渡すと、見覚えがあるというか先日もお世話になったと思われる先生が渋い顔をしてドアに身体を預けていた。

「う、うわ…これはやばい」

そう気付いた時には既に、時計の短針は…よく見ると時間は一応まだ八時前だった。それでもまあ遅いといえは遅い時間帯だが。

「何度も遅くなってすみません、すぐ片付けます」

俺がそう頭を下げながら片付け始めるとメンバー皆、肩で息をしつつ額に汗を滲ませながら片付け始めた。

「楽しいのは凄くわかるんだけど、帰りが遅いと心配なの。あんまり遅くならないようにね？」

ん？この声、なんか聞き覚えがあるなあ…と思って顔をよく見てみた。よく見てみなくても俺のクラスの担任の中野先生だった。なんとなく先日叱られた先生だと思っていたら、今日は中野先生だった。

「中野ちゃん！」

「なかのっち先生だー」

梓と愛が中野先生に気付くとなんだか近しいあだ名で呼んでいた。威厳もなにもあったもんじゃないな。

「こらこらちゃんと中野先生と呼びなさいな、まったく。ほらちゃっちゃんと片付けて帰るわよー」

中野先生の掛け声もあってか、実にスピーディーに片付け終わった。そして、各々ギターやベース、エレキヴァイオリン等荷物を背負ったり学生鞆を肩に掛けたりして帰る準備が整った。

「ああ、なんだか体が痛いな。この感覚久しぶりだ。あ、中野先生さようなら」

「はいさようなら。寄り道しないで帰ってね皆」

部室から全員出るのを確認して、中野先生に別れの挨拶をする。寄り道か、それもいいな…っといけない、今さっき駄目だって言われたばかりだった。そしてちらっと横に並ぶ色音部員を見ると「ね

えねえどつか寄り道しちゃおうか」等と楽しそうに盛り上がっていた。中野先生ごめんなさい、この人達多分貴女の言うことを聞いてくれそうもありません。

「でも：今日は本当に楽しかったわね」

秋乃さんが下駄箱の手前で呟く。それまで騒がしくしていた愛と梓も、同意しているのか秋乃さんの方を見つめて静かに頷く。そんな二人も月明かりに照らされて、その女の子のやり取りがまるで映画のワンシーンみたいだなあって思ってしまった。

下駄箱にて靴を上履きからローファーに履き替え、ずり落ちて落ちそうになったギターと鞆を背負い直すと玄関から外へ出る。まだ少し肌寒い、初夏の夜の風は俺達の間を優しくすり抜けていった。

「今日は充実した活動だったね、雨姫君」

「うん、コピーする曲も決まったし、漸く全員で演奏できたし最高に楽しかった」

そう言う梓はなにやら俺の顔を覗き込んでニコニコしている。な、なんだ、なんか顔についてるのか？そう思うと顔をなんとなく軽く擦ってみた。

「いや、雨姫君すっごく楽しそうだったなーって。ギターも上手くて雨姫君凄く格好よかった。なにより、そんな姿の雨姫君や皆をみて色彩音楽部、作ってよかったなーって」

「かつ：格好いいとか、照れますから。でも：うん。楽しかったよ本当。作ってよかったな色音部」

月の淡い光に照らされた梓の表情は嬉しそうに微笑んでいて、それがなんとなく幻想的に見えて、そんな目で見つめられるともうどうしていいのかわからなくなってしまうようになった。それこそ、映画のワンシーンのように。

「それに、今日のセッションで、雨姫君の声とギターの音を聞いて私の中に沢山の色が溢れてきたの。本当だよ？あの感覚は、不思議だったなあ。だから、忘れちゃわない内に帰ったらちょっと描いてみようかなって」

ふわふわと優しい笑顔を咲かせると、愛と秋乃さんの方へとてとてと歩いていった。そして俺の横を静かに歩く蓮時とも、先程下駄箱で思わずハイタッチをしてしまっていた。それだけでお互いが伝えたかった思いは伝わったと思う。

五人を包む初夏の夜風は月の仄かな灯りの静けさに先程までの演奏の名残を少しだけ感じつつも、確かな手応えと共に、皆で帰ったのだ――……

「つと、珈琲ちよつとぬるくなっちゃってら」

昨日の事を少し考えるつもりが思いのほかよく思い出せたので深く思考してしまった。楽しかった。そしてもっともっとあのメンバーで演奏したいと思ったし、もっとギター上手くなろうって改めて思ったのだ。

と、いうことで日曜日は個人的にリストアップした曲の練習をしようと思っていて、珈琲を飲み終わったら何の曲から始めようかなーなんて、なんかゆっくりマイペースだけれど、それくらいが俺には丁度いい。

切羽詰まってギターをやっても、楽しいっていう感覚が忽ち薄れていって虚しくなったこと昔あったから、余計に。

結局珈琲をぐいっと飲み干すと、何となしに新しくまた珈琲を注ぎ直してしまったので、そのまま珈琲を部屋に持っていく事に。

「あー珈琲美味い…さてさて、何から演ってみるかな」

曲のリストが書いてあるルーズリーフを眺めながらテーブルに置くと、部屋のスタンドに置かれたレスポールギターを取り出す。

無意識にチャカチャカとミュートピッキングしながらルーズリーフを暫し眺めてみる。

「じゃ、まあ一番上の相愛性理論から順番にやってみますか」

ルーズリーフの曲目の一番最初に書かれているのは、相対性理論だった。珈琲を一口飲むとオーディオに向かってリモコンを操作す

る。CDの読み込み音の後、イントロが始まったと同時に合わせてギターを弾いた。

アンプに繋いでいない、レスポールの生音がオーディオの相愛性理論の音に乗っかっていく。何回か弾いてみたりしていた曲だったので、あらまし弾くことができた。弾いている途中、何度か間違ったりはしたものの楽しく弾くことが出来た。メンバーと弾けたならどんなに気持ち良いんだろうと想像しただけで顔がにやけてしまう。

結果としてはまだまだ練習が必要だった。いざバンドのギターパートとして演るとなればもっとスムーズに、ミスも少なくしないと、ギター弾きながらちゃんと歌も歌えない。でもプロって訳でもないからたまにミスしたってかまわないのかもしれないけれども。上手くはなりたいたいと思う。

でもまあギターを弾いていたのは午前中の二時間位。一通りの曲は弾いてみたけれど曲目に関係ない曲を弾いていた時間のが実は多かったのはご愛嬌。オリジナルを考えて弾いてみたり、好きなバンドの曲をひたすら弾いてみたり。

後はもう指先が痛くなったので一時中断。その後は音楽流しながら昼ご飯を作った。我ながらこのカルボナーラパスタは改心の出来だった。温泉卵っぽいのも作ったしすごく美味しくできた。

お昼ご飯を済ませた後はちゃんと洗い物をして片付け、食後の珈琲を用意すると大きめのビーズクッションに腰を沈め、ゆっくりと本を読みながら過ごした。

ふと目に入った広告に載っている安売りの卵ともやしを早く買いに行かなきゃなんて考えながらごろごろだらだらしていたその時携帯が鳴った。

「んー…ん？誰だろう」

ちよつと離れた所に置いていた携帯をとるために体を仰け反り手を伸ばす。背骨がボキボキと鳴って少し痛くて気持ちよかった。携帯を開いて見てみると愛からの着信だった。

「雨姫おはよう、今なにしてるのー？」

「おう、おはよう。んー？さっき昼飯食ったところ」

「ほほう。因みに、なにを召し上がられました？」

「ん、カルボナーラ」

「おおっ！で、あたしの分は？」

「ねーよ、全部食べたわ」

携帯からでもずーんっと残念がっているのが伝わった。いやいや、普通一人暮らしなら自分の分しか作らないでしょうに。

「ま、カルボナーラはいつか雨姫に作ってもらおう事として…今からさ、ちよっと一緒に出かけない？」

「一緒に？」

愛とは幼馴染なので今までも時々一緒に出かけたり、買い物に付き合ったり付き合ってもらったりしていたのだけれど、最後に一緒に出かけたのはいつだったかな。覚えていないけれど高校になってからは無い。だからこうして誘われるのは凄く久々に感じる。

「うん。フレンドールに付き合ってもらいたくってさ。ほら、ベース見に行きたくって」

フレンドールというのは、駅前にある楽器屋の事だ。因みに俺の使っている機材は大体そこで買っていたり、置いてない物は注文してもらったりしている。そしてフレンドールの店員さんとは殆ど全員と仲良くなっていたりして、その店員さんの中にはセミアコのギターを譲ってくれた近所に住む気の良い兄さんも含まれている。とても身近にいる尊敬するギタリストだ。

「あー、うん。全然いいよ。丁度俺も駅前行きたかったし」

「ほ、本当っ？」

愛の声が心なしに弾んだ気がする。気のせいかもしれないけれどもなんとなく、そんな気がした。

「うん、もう行く？一応いつでも出られるけれど」

そう伝えると、玄関からチャイムが鳴り響いた。あんまり鳴ることのないチャイムには慣れていなくて毎回びっくりしてしまう。

「あ、ごめんまた掛け直すわ」

携帯の通話終了ボタンを押すとそのままテーブルに置き、小走りで玄関へと向かう。少し古いドアをゆっくり開くと、そこには先程まで通話していた相手が小首を傾げてそこにいた。

「……」

「えへへ、もう来ちゃった」

これなんてギャルゲですか？とかいってもまあ実は愛が遊びに来る時って何時もいきなりだったりするので慣れたものだが。

休みなので当たり前なのだが今日の愛は私服である。髪型はよくアップにしている後ろ髪を下ろしていて、ワックスかなにかで動きがついているその髪型はいつもと少し違う大人っぽい印象を受けた。服はライトブラウンな色調の花柄のワンピースにレギンスを合わせている。胸の辺りには沢山の輪や装飾がされた三日月のアクセサリーをしていて、女の子っぽさも兼ね備えた絶妙なバランスだ。まあ、久々に見た幼馴染の私服姿は可愛いかった。

「どうしたの？」

「あ、い、いや。じゃあちょっと待ってて？すぐ準備するから」

ばたばたと部屋に戻るとテーブルに置いておいた携帯をポケットにねじ込む。因みに今日の服はお気に入りだのダメージジーンズ。黒のボーダーロンTの上に古着屋さんで買った薄いアイボリー色したTシャツを重ね着したラフだけれど凄く気に入っているスタイル。財布をジーンズの後ろポケットに突っ込み、黒ぶちのメガネをかける。学校ではコンタクトなのだけれど、休みの日や部屋ではメガネで過ごしている為、今日はメガネで出かける事に。

「おお、雨姫のメガネ久々。メガネいいですなメガネ」

準備が終わって玄関の鍵を掛けていると後ろでぼそぼそと愛が呟いていた。学校以外で会うのは本当に久々だからだろうけれどメガネ姿がなんとなく気になるらしい。

「まあ今日休みだからなあ？休日と部屋に居る時はコンタクトは外してるし。ほい、じゃあ行くべ」

「そっかそっか、えへへメガネいいなあ。あ、うん！」

愛の懐かしいような心地よい雰囲気は昔から変わらずに無条件で安心するというか落ち着くもので、錆び付いた階段を下りると後ろから楽しそうに付いてくる愛を眺めると自然と笑みがこぼれている。

「んんー、気持ち良い！今日は天気いいねー」

「そだなー：いー天気だわ。あ、俺後で卵とモヤシの安売り行くからな」

晴天の土曜日の午後、他愛も無い幼馴染との会話。向かう先は楽器屋。ついでにCD屋にも行きたいし

、スーパ－の安売りには遅れられないなあなんて考えていたら足が止まっていたらしく「早くしないとおいで行っちゃうよー」なんて愛の声が聞こえてきた。

なんか緩いけれど妙に心地良いなんともいえない感覚で、この綺麗な青空を仰ぎつつ幼馴染と一緒に駅前に向かって歩きだしたのだった。



## ＊2－6色　琥珀サンバースト

「わー、今日も人いっぱいだね駅前」

透き通るような青い空にわた飴のような雲がぷかぷかと浮かんでいて、それを眺めていると初夏の風が体全体に爽やかに吹き抜けて気持ちがいい。現在日曜日の午後、ひよんな事から幼馴染と楽器を見る為に駅前にやってきていた。

俺の通う姫神高校の名前の由来でもあるこの自然が豊かであり、程よく拓けている姫神市。その姫神市の駅前には様々なショップがある。有名な珈琲屋や、夜は激しく賑わう居酒屋。幾つか建っているビルの中には沢山の服や雑貨、本やCDを扱っているショップがひしめき合っている。姫神市に住む住民は結構駅前に買い物に来ていて、ここには大体の物が揃っているからだろうな、実際俺もよく駅前に足を運ぶ。

今日は愛と楽器を見に行くということで、行き着けの楽器屋さんのフレンドールに向かっていった。まあその流れで帰りとかにCDも見たいし、本も見たいとどんどんしたい事が増えていくので気を抜くと財布の中身がちよつとした氷河期に入るので、財布の紐を縛らないと大変な事になるから油断できない。

駅前までの道のりはそれ程距離がある訳ではなく、まあ近くもないのだけれど。俺の住むアパートから幼馴染の愛と他愛も無いような会話をしながら二十分と少し位歩いた所で駅前に到着してしまう。

「そういえば愛はなんか欲しいベースって目星つけてるの？」

「うーん：普通のエレキベースも勿論欲しいんだけど、雨姫から貸して貰ってるから：アンプライトベースがあったら弾いてみたいなって。もしあたしに合うならいつか欲しいなって思ってたんだあ。でもでも近々買いたいって思うのはやっぱり自分のジャズベかな。プレベも欲しいけど」

「アンプライトベース、か。マニアックというか目の付け所が凄い

な」

「雨姫から教えてもらったアップライトベース弾いてるバンドのPV見たときにカッコいいし音もよかったんだよね」

「あー、こないだ教えたバンドか。カッコいいよね。まあ俺もそのPV見たことあるけど……多分フレンドールには無いと思うよ。置いてあるの見たことないし」

「がーんっ……そうなんだー」

「アップライトベースは珍しいからね。でも確かにウッドベース出身の愛にはしっくりくる楽器かもね」

「今すぐ欲しいって訳じゃなかったからいいけどね。だとするとやっぱり私はジャズベースかな」

今話題に上がったアップライトベースは、エレクトリックウッドベースといえばイメージしやすいかも知れない。軽量化されたボディは勿論軽くてびっくりするくらい薄い。以前ではウッドベースの代用品として扱われるとが多かった時期もあるんだけど、今では一つの楽器としての地位を確立しジャズ系の音楽は勿論ロック、ラウドやエモ、スカ等激しいロックにも使われる事が多くなった。

因みに今愛に貸しているベースもジャズベ、所謂ジャズベースというもの。まあ有名なメーカーのものではないけれど。

ジャズベは、プレシジョンベースのサウンドをさらに拡張し様々なジャンルに適応させたモデル。ピックアップがフロント側とリア側とで二個搭載されるようになった為、二つのピックアップのバランスを調整する事で幅広い音作りや、芯のある中低域、全体的な音の多さが特徴となっている為、多くの人に人気である。

「なるほどね、何かこうやって自分の楽器買う時とか選んでる時、試奏してる時とかさ、楽しいよね」

「うんっ、本当わくわくしちゃう。早く試奏したいなあ」

「うん、愛に合うベース見つかるといいね」

そう呟くと満開の微笑みで頷く幼馴染は活き活きしててこちらま

で楽しくなってくる。楽器屋に並んだ沢山のギターやベース等の楽器を見ているだけで、高揚する自分としては楽器選びに付き合う事は楽しくて仕方ないのだ。

愛と他愛のない話題を交えつつ歩いていると、件の楽器屋のフレンドールが見えてくる。駅を目の前に見て東側に並ぶビルやショップの奥、曲がり角の所にフレンドールはある。

外観はそこまで新しいものではなく、入り口の上には存在感のある看板がある。昔から経営している為か外壁が所々錆びてたり傷んでたりしているけれど、それも雰囲気があって個人的には好きなのだ。

店の中から溢れる楽器屋独特の雰囲気と、流れる好みの音楽につられて早速入店する。

「いらっしやいませー…って、おーう雨姫か」

「どもども」

もう既に顔見知りの店員さんが俺の顔を見るとそう挨拶する。俺の隣にいる愛も会釈すると、店員さんがなにやら意味有りげな視線を送ってきた。恐らく「女連れてきやがってこのやろう羨ましいなてめえちきしょう」あたりなのだろう。会ったび彼女募集中なその店員さんは必要の無い空気を読み、店の奥へと寂しそうに消えていってしまった。多分だけれど彼女だと勘違いしたのだろう。幼馴染なんだけれど、愛が俺のことそうゆう風に…：…いやいやいやそんなギャルゲみたいな展開なんてないって、うん。

「うわー、あたしフレンドール来たの何年ぶりかな。何かさ、いざ楽器を目の前にするとやっぱりテンション上がっちゃうねっ」

陳列された沢山の楽器達を眺める愛の表情はほんのり朱色に染まり、興奮しているのが一目でわかる。まあ俺も人の事は言えなくて、実際今凄くテンションがどうしようもなく上がってしまった。スタンドに立てられた色とりどりのギター、レスポールやジャズマスタ―、ストラトにテレキャスター等の様々なモデルに、高くて手が出ない憧れのブランド。棚に陳列された喉から手が出るほど欲し

いエフエクター。

「おうふ…ふおお…」

「ちょ、ちょっと雨姫どこいくのっ？　今日はあたしの楽器一緒に選んでくれるんでしょ？」

おっといけない、愛に止められなかったら思わずふらふらと目に入った憧れのギター目掛けて行く所だった。だって喉が渴いている人の目の前に美味しい水があったら…ねえ？

「もう…えーっと、ベースのコーナーはどこかなっ」と

腕を掴まれ半ば引きずられる形で連れて行かれる。これが意外と痛いので、良い子はまねしちゃいけませんよ。友人は優しく引っ張りましょう。

「いやいや、ねえ自分で歩けますから、決して単独でギター見に行ったりしませんから離して下さいお願いします愛さん」

そうお願いする俺をちらっとみて「仕方ないなあ」なんて呟く愛は、言葉とはうらはらになんだか機嫌がすごく良い。久々の楽器屋を楽しんでいるんだなと思うと、なんとなく腕の痛みが気にならなくなるくらいには嬉しくなった。

「おお…ねえみてみて雨姫、沢山あるねっ」

スタンドに立てられているのと、壁に掛けられた様々な楽器を見ると愛は感嘆の声をあげた。薄く塗られたグロスがやけに色っぽく感じる唇も、緩く弧を描いてにやけっぱなし。

「何か気になるのあったら試奏させてもらったらいいよ」

「うんっ、そうする。じゃあ…一番気になったこの子かなっ」

一通りベースを眺めて、愛が手にしたベースは少しくすんだような、乾いたような茶色のサンバーストで、味のある塗装の綺麗なジャズベースだった。鈍く光るボディと、なんだか異様に重厚な存在感を放つ力強さで、その奏でる音はきつと良いのだろうと早く聴きたい衝動に駆られた。

「おお…綺麗なサンバースト。色の感じは俺も好みだな。メーカーもまた凄いの選んだな、早速試奏させてもらいなよ」

店員さんを探そうと辺りを見渡すと、いつも世話になっていて近所に住んでいる藤さん<sup>ふじ</sup>がなにか修理中なのか、工具をぶら下げながらちょうどよく近付いてきた。

「おう雨姫、いらっしやい。なんか見にきたの？　っと、もしかしてその娘がこないだ言ってた雨姫のバンドのベースの娘？」

藤さんの容姿はくせつ毛の黒髪で、長さは長くもなく短くもない。整っている顔立ちに男らしい輪郭で、顎には髭がお洒落に生えている。ジーンズとバンドTシャツ姿に、淡い緑色したフレンドールの名前が入ったエプロンをしている。言わずもがなギターが凄く上手く、格好良くて身近にいる憧れの兄ちゃんなのだ。

「久々です藤さん。そうそう、この娘が幼馴染の愛でベース弾いてるんだ」

「こ、こんにちは。初めまして、望月愛っています」

藤さんの登場に見るからに緊張している愛は会釈しつつそう挨拶した。

お互いの軽い自己紹介をした後、早速藤さんに頼んで試奏させてもらうことに。愛が選んだサンバーストのベースを持って、アンプが置いてあつて試奏できるスペースに三人で移動する。

「渋い色選んだねー。うん、俺も好きだなこのジャズベ。弦高も低くて弾きやすいし」

因みに藤さんの言う弦高というのは、ギターやベースの指板と張つてある弦との間の高さの事だ。実際にフレットを押さえてみれば、その押さえ易さを理解してもらえると思う。まあ弦高が高くても勿論メリットはあるんだけども。

藤さんは椅子に座ると、手際良くセッティングを済ませてチューニングを終わらせる。藤さんが弦を指で弾くと、アンプからはサンバーストのベースが奏でる重低音が鳴り響いた。

「おお：雨姫、ねえ雨姫」

ベースから目を離さずに俺の袖をくいくいと引っ張る。はやる気持ちを隠せない幼馴染の様子は何だか小さい頃の愛を見ているよ

うでなんだか懐かしくなった。

「はい、いいよ。じゃあ望月ちゃん試しに弾いてみて」

「は、はいっ」

チューニングが終わった藤さんが、試しに適当に弾いたのであるうたった少しのフレーズが妙に耳に残って、でもそのフレーズが凄くカッコよくて二人して目を合わせ驚いていると、愛は嬉し恥ずかしそうに藤さんからベースを受け取り、椅子に座る。自分の愛器になるかも知れないベースを太股の上に乗せ、じっくり眺める。ネックを握ったり弦を触ったりしながら噛みしめている愛の表情はもう緩みっぱなしなようだった。

「な、なんだかそんなに見られると緊張しちゃいます」

藤さんと俺を見上げながらはにかみながらも、愛は少しづつベースの感触を味わっている。

「ま、ゆっくり試奏してつてよ。またなんかあったら近くにいら呼んでくれな、雨姫」

愛の気持ちを察したのか、藤さんはこの場から離れていった。実際試奏する時に店員さんが見ている前で弾くのは恥ずかしいと思う人って実は結構いるのだ。俺はむしろ近くにいてもらって色々話しながら試奏したいタイプだけれど。

「ネック握った感じ：しっくりくる」

そう呟くと愛の指が弦を弾きだした。滑らかな運指から奏でられるベースの音は力強くアンプから流れだして、その重低音に思わず指がつられてピクっと反応してしまう。

「へえー良いね、音がやっぱり良い。愛はどうよ、弾いてみてどんな感じだった？」

「惚れた……あたし、とうとう出会っちゃったかもしれない」

そう呟く愛の瞳がありえない位キラキラしてて、頬に手を当てている。なんだかちよとした少女漫画のような表情をしている。恍惚と膝の上に乗っているジャズベースを見つめ、自分の世界に入ってしまったって何度か肩を軽く叩いて呼びかけても反応がない。頬

むからベースにその垂れかかっている涎だけは垂らしてくれるなよ、  
凄く高いんだからと小さく呟く。

「おう、もう試奏はいいのか」

藤さんを見つけ、小さく手を上げるとまた藤さんがやってきてく  
れた。フレンドールのエプロンの中にはさっきまで持っていた工具  
が入っている。

「凄く気に入ってた、この通り。もう完全に余韻に浸ってるね」

「おお……本当だ。なんか、ここまで恍惚としてる女の子って滅多  
に見れないよな。まあ気に入ってくれたのなら嬉しいわ。あ、俺今  
ちよっと壊れてしまったからギター直してくれて依頼の仕事忙し  
くてさ、後で今野<sup>いまの</sup>こっちに呼んどくから、何かあったら今野に言っ  
てくれ」

「あ、うん。わかった。忙しい所ごめん藤さん」

今話題に上がった今野<sup>いまの</sup>さんは、凄く背が高くフレンドールの従  
業員の中でも頭一つ抜きん出ている。身体の線はスマートで細くて  
繊細な印象を受ける。髪型は天然のパーマ。今野さんはこの店でも  
信頼されている技術者であり販売員だ。それに藤さんが趣味でやっ  
ているバンドのベーシストでもある為、前に姫神山のフェスの裏方  
をやった際に、オープニングアクトで出ていた藤さんのバンドで今  
野さんを知って、打ち上げで紹介されてから仲良くなったのだ。因  
みに、ドラムの人はこの店とは違う所、まあ駅前なのだけれど美容  
師として働いていて、名前は小野寺<sup>おのでら</sup>さんという。

少し足早に去っていく藤さんの姿が見えなくなった数分後に、今  
野さんがゆっくり歩きながらやってきた。

「おう、いらっしやい。今日は雨姫くん一人じゃないんだ。お、ベ  
ース？」

愛の膝の上に乗っているベースを見ればそう呟いた。フレンドー  
ルのエプロンのポケットに手をつ込みながら愛の近くに來て試奏  
中であるベースを眺めている。

「いや、また渋い色選んだね。因みにこのフレンドールにあるベースでもこいつはかなりお勧めかな。少し学生にはキツイ値段ではあるけれどね」

今野さんはそう言うと、愛は正気を取り戻したようで、ようやく自分の世界から帰ってくれたみたいだった。少女フェイスも戻ったし、涎は大丈夫、垂れていない。

「あ、あのっ。これ：この子欲しいんですけどっ」

「うおおおい、ちょっとまってちょっとまって。値段！値段ちゃんと見たか？十七万ちょいじゃん、即決するのは早いって」

びっくりした。ああびっくりした。久々にがつつり突っ込んだじゃったよ。そう、この幼馴染は直感で欲しいと思ったら大体その場で買ってしまうのだ。今までも小さい頃に何度もそういう愛を見たことがある。

「そ、そうかなあ。でも、うーん欲しいなあ」

駄々をこねる子供のように唇を尖らせてベースを撫でている。そんな愛の姿に今野さんは心なしか優しげに笑っているように見えた。大人な笑顔。

「えっと、望月ちゃんだっけ？もしなんたら特別ローンとか組めるけど、どうしようか。別に今焦って決めなくてもなんなら寄せとくし」

「わわ、特別ローン！すごい助かります。うーん……ねえ雨姫、どうしたらいいと思う？」

今野さんからの魅力的な提案に悩む愛は、膝にベースを抱きかかえながら見上げている。自然と上目使いになってるで、うん。そんな愛にちよっとドキッとしてしまったのは内緒。

「そうだなあ。やっぱり財布と相談、だよな。ローン払えるかを考えるのは勿論として、やっぱりこうゆうのって勢いですよね今野さん。ぶっちゃけ俺も勢いでギター買ったし」

「うん。レスポールだったよね確か。何度も見に来ては試奏して、藤に取り置きしてくれって頼んでたもんね」



「いやあ、恥ずかしいです。でもあの時は売れないか心配だったんですよね凄く」

「買い手が付きそうに何度もなったんだよ実際。でもずっと雨姫くんに渡るように、雨姫くんのところにいくようにあのレスポールも待ってたんだねきつと。結局やっぱり雨姫くんのところに渡っていった」無論頑張ってバイトしながら貯金をちゃんとした上でだったし、偉いと思うよ。と今野さんは付け足してくれた。ううーん、こりゃちょっと照れる。

その後、愛はしばらく悩んで買うことに決めたようだった。もとも自分のベースを買う為にずっと貯金していたらしいし、何より気に入ったからだろう。

「じゃあ、今日持つてく？　持つて行くなら今ささっと微調整して渡すし、発送して欲しいなら梱包して送るけど」

「今持つて行きます、持つて帰りますっ」

わかった、ちょっと待つてと微笑むとベースを持つて店の奥へ今野さんは準備しに行つてくれた。

「ねえ雨姫、ねえねえ。えへへー嬉しい」

これ以上ない満面の笑顔で小突いてきた。あーものすごく嬉しそう。煌びやかな粒子が飛び散つてる。楽器を買う、というのは俺も何回か経験しているけれど、うん。愛の気持ちはすごくわかるのだ。「良かったじゃん。大切に使いなよ」

「うんっ、勿論。あ、雨姫のベースつて返した方がいいかな？」

そう、愛には一応無期限でベースを貸している。安いけれど気に入つてるベースだ。

「ああ、愛がもう使わないなら返してくれてもいいし、もしまだ使うなら借りててもいいよ」

「そっか。じゃあ……借りててもいい？」

「うん、全然いいよ」

そんな会話をしていると、レジの方から今野さんが手を上げて「

準備できたよー」と声を掛けてくれた。嬉しそうに椅子から立ち上がった愛に引っ張られるように一緒にレジへと向かう。

「お待たせ、じゃあ代金はこれね。後は返せそうなときに持つてきてくれればいいから」

「ああ、その返せるときって特別ローン本当に助かります」

勿論信用あつての特別ローンなので誰でもこのローンを組めるわけではない。気に入った、信頼できる相手のみだ。フレンドールで特別ローンを組めるようになってるのは、多分藤さん達も過去に楽器、ライブ等でお金に困った経験があるからだろう。やっぱり楽器はなかなか手が出せないのは俺も身をもって経験しているし。

「ありがとうございますー。帰りは気をつけるんだよ」

今野さんがカタカタと慣れた手付きで会計を終えたと笑顔でそう挨拶する。その声を聞いて奥から藤さんが顔を出して小さく手を上げるとふわっと微笑んだ。藤さんのそうゆう何気ない仕草がなんか格好よくて、また来たいなって気持ちにさせてくれる。

店を出ると太陽もだいぶ傾いてきていて、久々の眩しい光に少し目が眩んだ。愛はでれでれしながら背中に背負っているベースを自慢げに見せてくる。本当、愛は変わってないんだよな昔からこうゆう所。

「弦とか色々サービスしてもらっちゃった。えへへへ、嬉しい」

「良かったな。まあとりあえず折角新品のベース買ったんだからぶつけたりしないように気を付けてな」

「ふふん、わかってるもーん」

「いや、まあ気を付けているんならいいんだけどなんかほわほわしてるから危なっかしくてな」

「だって、嬉しいもん」

フレンドールから出て駅の方にあるCD屋へと向かっている途中、愛は気を付けるもんつと言った直後、駐輪している自転車にぶつかりそうになっていたから、やっぱり發送してもらったほうがよかった気がする。うん。

「あたしの用事はもう済んだから、あとは雨姫の買い物に付き合うよ。確かCD見に行きたいんだったよね？」

「んー、そだな。ちよつとCD欲しい新譜たまっちゃってるから売ってたら何枚か買いたいかも」

「あたしもちよつと見たいから、今からいこっか」

数歩先に歩いてって振り返った愛の微笑みは、傾いてきた太陽の光のせいかな、初夏の爽やかな風のせいかな、沢山の光を浴びた愛は何かの映画のヒロインのように眩しかった。不覚にも見蕩れてしまった――

丁度駅とフレンドールの間らへんにあるビルの地下にあるCD屋には、来た道を一緒に戻って数分で到着する距離なのですぐ着いた。

ビルの中に入ると、一階から最上階までファッション関係のショップがひしめき合っている。正直販売している服の値段が学生には厳しいほど高いので、俺はあまり見に行くことはなかったりする。地下にはCD屋の他に雑貨屋も展開していて、CD屋での買い物した流れで雑貨屋にもよく足を運ぶ。

「相変わらずこの地下は居心地いいな」

「なんかこのゴチャゴチャした感じとか雨姫好きそうな感じだもんね」

「まあただゴチャゴチャしてたら、なんか嫌だけど此処のゴチャゴチャ感は好きだな」

「こういう所に来るとやっぱり財布の紐緩くなっちゃうよね」

「そうだな、って愛はちゃんと縛っとけ。今日でっかい買い物したんだし」

「えへへへ、そーでした」

地下へと続くエスカレーターを並んで降りながら他愛もない会話をする。その際も愛は背中にある買ったばかりのベースが気になっ

ている様子でちょいちょい触ったり撫でたりしていた。いやまあ気持ちちはわかるけれど。

そんなやりとりをしながらCD屋へと入る。視界に広がるCD、CD、CD。視聴機も沢山設置されていて、入店した途端俄然テンションが上がってくる。

「いらっしやいませー」

店のロゴがプリントされた黄色いエプロンをした店員が笑顔で挨拶をしてくれる。そんな店全体の雰囲気も、とても好きだ。

「さてさて、探しますかね」

そう呟けばお目当てのCDを探しに店内を歩く。欲しいCDは数えればキリがないので厳選しなければならぬ。最初は何探そうかなーと考えていると、後ろで愛が「わわっ」と声をあげていた。

「どしたの？」

「えっ、あ、うん、えへへへ、うん」

見るからに挙動不審な愛の様子に首を傾げていると、後ろから聞き覚えのある声がして振り替えるとそこには秋乃さんがかごを腕に掛けて立っていた。

「あら。あー…ん、えーと、望月さんちよつといいかしら」

ふわり微笑む秋乃さんは初めて見る私服姿で、そのあまりの可愛さに目を奪われてしまった。

ふわふわ揺れるパーマが掛かった髪は、今日は結っておらずに降ろしていた。オーガニックなワンピースに、薄い黄色系のカーデiganを羽織っていて、落ち着いている初夏を思わせる絶妙な色合いはとても秋乃さんに似合っている。その姿は見るものの視線を引っさらっていく可愛さだ。オーガニックなワンピースに白いミニスカートがまた上手くコーディネートされていて、正直見とれてしまっていた。いや、決してワンピースとミニスカートからすらっとのびる綺麗な生足に目を奪われたわけではない。……嘘です、がつつり奪われましたすみません。

愛は秋乃さんの可愛らしい手招きの方へとふらふらいつてしまった。きっと所謂ガールズトークというのが始まったのだろうと、邪魔しないように俺は一人CDを見に行くことにした。

「あったあった、これこれ」

今では独り言になってしまったけれど、ジャパニーズロックコーナーに到着した俺は、お目当てのCDを見つけていた。本当は買いたいCDは沢山あるのだけれど、毎回財布事情により諦めてしまうCDが多くて、いつも歯痒い気持ちになる。

「古音君、欲しいの見つかった？」

欲しかったCDを何枚か諦めて、二枚程棚から取り出したところで、後ろから秋乃さんが天使のような微笑みで話し掛けてきてくれた。何だろう、気のせいかもしれないけれど、店内の男性客から妬みの視線を感じる。いやごめんて。

「あ、はい。すごく悩んだ末の二枚ですけれどね。まだ洋楽とJAZZHIPHOPもまだ見てないから多分今日は財布寒くなりますわ。秋乃さんも、CD買いにきたんですか？」

「うん。私色音部に入部してから今までより音楽聴くようになって結構CDも買うようになったんだよ」

「おお、なんかそうゆうの嬉しいです」

「それに梓ちゃんと一緒に画材買ったりしてるしね」

「あー、そうなんです。近々またなにかみんなで描いたりしたいですね」

「うんうん。あ、折角だから私のCD選び付き合ってくれない？」

「勿論ですよ。むしろこっちからお願いしたいくらいです。そういえば、愛はどこいったんですか？」

「望月さんなら、みたいCDと雑貨があるとかで、見に行ったみたいよ？」

「あー成る程、そうですか。なんだ一言いえばいいのに」

なんだろう、今なんだか少し引っかかるような気がするけれどもま

あ不粋な事は考えないでおこう。折角秋乃さんもこう言っていることだし、一緒にCD選びをする事にした。

「秋乃さん今日はどんなの買いにきたんですか？」

「試聴機とかでオススメされてるやつとか、ネットで調べて聴いたバンドのCDとか欲しくてね」

隣で微笑む秋乃さんの腕にぶら下がっているカゴには既に何枚かCDが入っていた。

「でもあらまし選んだから、あとは折角一緒にCD見てるんだし古音君オススメの一枚をと思って」

「おお、なんかそうゆうシチュエーションも嬉しいです。ちょっと照れますね。うーん何のバンドがいいかな、どうしよう」

オススメのCDはなに？と聞かれると嬉しくなる反面何をオススメしたらいいのかすごく悩む。例えばジャンルはなにか、とか。今回はロックだけれど、そのロックにも色んな形がある訳で、バンドによってその色が違ってている。分かりやすいとこだとメタルやハードコア、グランジ、メロコアやエモなどの激しいバンドか、落ち着いたバンドなのかとかである。

「あ、このバンド、すごくクリートンが澄んでてお洒落な曲作ってて、俺は好きですけどね」

「えっ、本当？ どれどれ」

お気に入りの二つのバンドの1stアルバムを棚から取り出すと、秋乃さんが近くに寄って覗きこんでくる。

というか、秋乃さんからシャンプー、もしくは柔軟剤なのか香水なのか。そんなとてつもなくいい匂いがふわり空気に乗ってきて、頭がくらくらして思わずCDを落としてしまいそうになる。

そして、そんないい匂いを惜しみなく醸し出している秋乃さんの私服がワンピースだから、胸元がいつもの制服の時よりも強調されていて目のやり場に困ってしまう。勿論凝視などしていません、：

「古音君、どうしたの？」

「い、いえ、何でもないです。それよりどうしようかな。あの、この二枚は結構強めにオススメなんで、秋乃さんの好きなジャケットの方のCDを選んで下さい」

「おお、どっちも聞いたことない名前のバンドだなあ。古音君、流石だね。うーんどっちにしようかな。どっちもジャケット凄く綺麗で迷っちゃうな」

俺が差し出す二枚のCDはを見詰めて、秋乃さんは口元に指をくつつけながら悩んでいる。この人はどんな仕草をしてもなにをやっても可愛いな。いい匂いはするし、どれだけ世の男子を惑わすおつもりなのでしょう。秋乃さん。

「決められないー、もう今日買わなくても多分別の日に選ばなかった方のCD買いに来ちゃうと思うから、私どっちも買うことにする」

「おお、大人買いですな。ってか秋乃さんのそのカゴの会計が恐ろしいです」

「えへへ、私貯金とか今まであんまり手付けてなかったし、今のところまだ余裕あるんだ。けれどちゃんと節約できるところではしてるんだよ、これでも」

秋乃さんは意外と節約家だった。なんだか想像しづらいのだけれどもしかしたらタイムバーゲンにも行ったりするのだろうか。もし、あの戦場に至高の華の如く秋乃さんがいたのなら俺は彼女の為に戦士になるだろう。そう、タイムバーゲン戦士。しっかり二人分勝ち取ってみせる。

つと脱線した妄想を取っ払ったところで、まだ見てなかったジャンルの棚や洋楽の棚と一緒に見て回って、オススメしたり一緒に視聴したりした。偶然とはいえまるでデートの様だったので緊張しながらも幸せな気持ちで楽しく見て回ることができた。

レジにてお互いの会計を済ませると、黄色いCD屋のロゴが入ったショップ袋を手につけ、気に掛けていた愛の姿を探す。

「あれから、愛見なかったな。本当にどこにいったんだろう」

「えっーと、あ。いたいた」

秋乃さんは愛の姿を見つけるとひらひらと手を振って、それに氣付いた愛はとてとと小走りで近寄ってきた。

「愛どこいってたんだよ、ちょっと氣になってたわ」

「いやー、うん。ちょっとみたいCDとか雑貨あったからさ、ごめんごめん」

「そっかそっか。それで見つかった？」

「んーん、結構探してみたけど見つからなかったから、店員さんに頼んで注文してきたよ」

「へえ、なんか氣になるな。氣が向いたら貸してよ」

「えへへ、うん。全然いいよ」

愛は愛で用事を済ませれたみたいでほっと胸をなで下ろす。相変わらず嬉しそうに背中のベースに触れたりしているのを見てなんだかこっちまでほっこりした氣持ちになった。

「このあと古音君と望月ちゃんはなにか予定あるの？」

「うーんあるっちゃありますけれど、ないっちゃありませんね。どうしたんですか？」

「うん、折角だからみんなでお茶したいなって。ほら、この上に珈琲屋あるじゃない」

「おおっ、いいですねっ」

秋乃さんが提案する珈琲屋は、今いるビルの地下からエスカレーターで登って、入り口付近にあるカフェだ。高校生が帰りにノートを広げて勉強していたり友達とゆっくりしていたり。勿論パソコン使っているサラリーマンやOLなんかも集まる人気スポットだ。

そんな魅力的な提案に目を光らせて賛成した愛は、見るからに嬉しそうにしている。

「じゃあ決まりね。私喉乾いちゃった、さていこっか」

先導をきって歩き出す秋乃さんな笑顔は少し蒸し暑く感じるビルの地下店内に居るのに、心なしか涼しいような、暑い夏の散歩中に氣紛れに吹く涼しい風のような爽やかさに、素直に感嘆した。たまたま此処に居合わせた男の視線を一瞬で奪っていった事には、きつ



と気付いていないんだろうな。

とりあえずエレベーターをあがって、二人に着いて行くとあつという間にお洒落なカフェに到着してしまった。実を言うとなんかこのカフェに興味はあったものの、お金の問題や注文方法がよくわからないという理由で一回も足を運んだ事が無かった。

「さて、何頼もうかな。雨姫は何頼む？」

「愛、あのさ、実はさ」

「望月ちゃんは何に頼むー？私この抹茶のにしよっかなっ」

実は頼んだことがなくてよく解らないと言おうとしたら秋乃さんが遮ってしまった。なんかおかげで言い出せなくなって結局一番最後に注文して、事情を話したら店員さんが懇切丁寧に説明してくれた。うう、後ろにちよつとした列も出来てたし恥ずかしかった。なんでSMLの表記じゃないんだよ。

「いやー、まさか雨姫、頼みかた解らないとは思わなかったよー」

「ねー、ちよつと意外かも。あの戸惑ってる古音君可愛いかったなあ」

愛は先程買ってきたベースを椅子の横に置き、自分に立て掛けている。愛が注文したのはホワイトチョコのアイス珈琲だそう。美味しそうにホワイトチョコ珈琲を一口飲むと小馬鹿にした様に微笑んでいた。

秋乃さんは抹茶のラテの上になにやらクリームがこんもりトッピングされている。ほのかに苦味があって、クリームの甘さとのバランスが絶妙なのだそう。専用のスプーンで抹茶に浸したクリームを口に運ぶと、秋乃さんも小悪魔的な微笑みをして此方を見つめていた。

「しょうがないじゃん、やっぱ初めては入りづらいし注文の仕方もあるから迷うって。秋乃さんも可愛いとかやめて下さい照れます」居心地が少し悪くて、間を持たせようと注文したドリップ珈琲を一口飲むと、少しきつめの苦味ががっつと味覚を刺激する。カラ

つと音を立てる氷が冷たさを引き立ててとても美味しい。自分で淹れる珈琲とはやっぱり全然違った。

それから、外からの風が気持ちよく入り込む快適な店内で、珈琲片手に今日買ったCDの話や愛の買ったベースの話。それに色音のこれからについてや、どうでもいいようなくだらな話をしていると時間がゆっくりと流れていった。

気付くと外はもう夕暮れ、空は様々な赤や薄紫で彩られ焼かれていた。ゆっくりと流れる時間に身を任せていたらもう既にスーパールのタイムバーゲンは終わってしまっていたけれど、買い物は楽しかったし秋乃さんと愛とまったり珈琲を飲めたから、多少心残りだったけれど良しとすることにして、他愛の無い話に花を咲かせたのだった。

## \*CD屋での一コマ

「ちょっといいかしら、望月さん」

うわわわ、水無月先輩だあ、どうしよう絶対なんか言われる。ここは大人しく従ったほうがよさそうだな……。

「は、はい。水無月先輩、こんにち。み、水無月先輩も買い物ですかっ？」

「うん、CD買いにきたんだー。っていうかどうしたのよ、そのよそよしさは。そして一昨日まで望月ちゃん私のこと秋乃ちゃんとか呼んでたじゃない」

うう、相変わらず眩しくて柔らかい微笑みをくれるなあ。そして今日も超絶可愛い。そう、私は今幼馴染の雨姫と買い物中だ。そして何故あたしがこんなに動揺しているのかは、なんとなく先輩が雨

姫のこと気になってるような気がするっていう只の女の感ってやつだ。因みになんとなくあずあずもそんな気がする。

そこであたしが休日<sup>ひゅう</sup>に雨姫と買い物してるところに出くわしたらどうだろう。いや、誤解<sup>ごかい</sup>はしないで欲しい、決してみんな不仲な訳ではない、むしろ凄く仲がいいとあたしは思っている。

「連絡くれたらよかったのに、私も望月ちゃんと古音君とも買い物したかったなー。背中<sup>せなか</sup>のベースはどうしたの？」

「ははは、すみません、ベース選<sup>え</sup>びに雨姫に手伝<sup>てづ</sup>ってもらっちゃいました。でも決してこれ抜け駆けとかじゃないからねっ、秋乃ちゃん」

「あははは、わかってるわかってる。可愛いなあ望月ちゃんは」

ううー、やっぱりすごく大人っぽくてで私服もこんなに可愛くて、一枚も二枚も上手な気がするなあ。見透<sup>みとお</sup>かされてる、のかな。やっぱこうゆうところ、敵<sup>てき</sup>わないなあ。

「じゃあじゃあ折角だからCD選<sup>え</sup>びに、古音君に手伝<sup>てづ</sup>ってもらいたいんだけど、いいかなあ？」

そんな先輩の提案に、若干の後ろめたさがあるあたしは元氣よく、そして潔くこう返すのだった。

「も、勿論ですがなーっ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1036m/>

---

色彩コード

2011年11月14日16時58分発行